女子新國語讀本

新制版

卷四

4b
810
昭13

42367

教科書文庫

4
810
42-1938
2000 0
81500

資料室

京都帝國大學
教授文學博士 澤瀉久孝
奈良女子高等
師範學校教授 木枝增一 共編

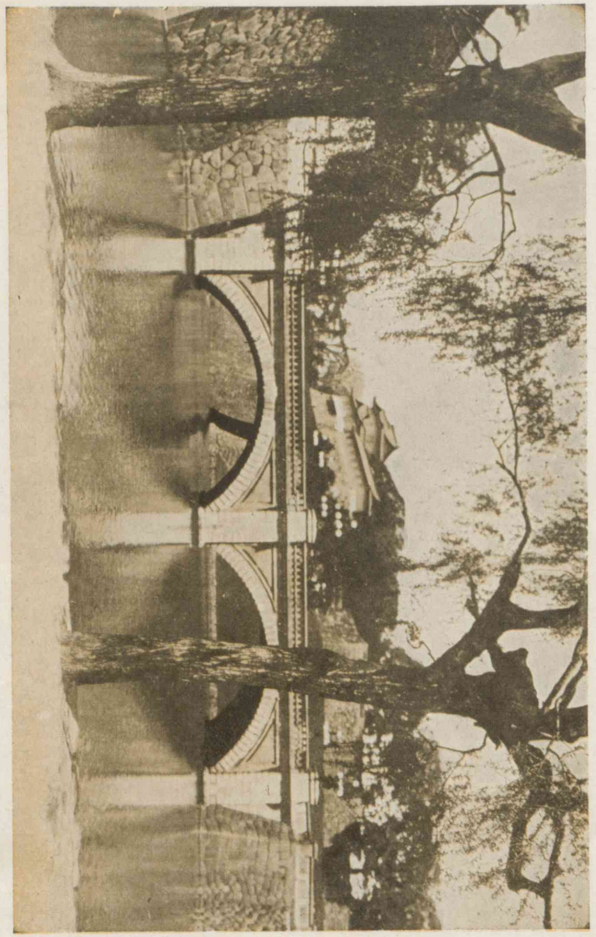
女子新國語讀本

新制版

文部省檢定濟 昭和十三年二月十五日
高等女學校 實業學校 國語科用

修文館發兌

4b
810
BB13



（第一圖參照）

広島大学
教
81500
図書

國語研究會編

澁澤久孝先生
木枝增一先生

女子新國語讀本 新制版 自習書

卷一ヨリ卷一〇マデ
定價各金四拾五錢
送料六錢

【內容について】

大　意……全文の意味を最も簡潔にまとめました。

文　段……1・2・3・4・5と各文段に別けて頁數を示し一目で文段を明瞭に致しました。

語句釋……出來る限りの單語を集め親切な解說を示しました。

釋　通……語句釋だけの解說で理解出來ない文章には親切な解釋文に直して充分理解の出來るやうに致しました。

頭　注……頭注にある古歌、文法、假名遣等に就いて親切な解說を示しました。

鑑　賞……各課全部に正しい鑑賞を示し皆樣の鑑賞力を深めるやう努力致しました。

研究問題……各課の終りにその課に付いての模範問題を示し皆樣の復習の力を強めるやうに致しました。

發行所　大阪市住吉區田邊東ノ町八丁目二五　文教書院

發賣所　東京市神田區神保町一丁目二五　振替口座東京二六四四番　東京修文館
大阪市東區博勞町五丁目五六　振替口座大阪四七一番　修文館

編纂の趣意

本書は、昭和十二年三月二十七日改正發布せられたる高等女學校國語科教授要目に則り、左の諸點に留意して編纂しました。

一 **國民精神の體得**―これに就いては、國體の精華・國民の美風・偉人の言行を敍し、特に日本女子としての特性を養ふに足る材料を選定しました。

二 **文學精神の涵養**―これに就いては、國文學の本質に基づき、時に於ては古今、形に於ては樣式の種々相に亙り、心情を優雅ならしむべき材料を選定しました。

三 **國語精神の把握**―これに就いては、各教材が總べて醇正なる國語に採つてあるのは勿論、更に國語の正しい相を認識せしむると同時に、國語愛護の念を培ふに足る特別なる材料を選定しました。

右三點の外、世界の情勢を知らしめて圓滿なる國民的常識を養成するに足るもの、女子の本務たる家庭生活の趣味を向上せしめるに足るものをも加へました。

昭和十二年七月

木枝增一
澤瀉久孝

目次　卷四

一　吾人の皇室　永田秀次郎　一
二　菊盛　北原白秋　五
三　文章の道　島崎藤村　七
四　木犀の香　薄田泣菫　一三
五　秋深い日　室生犀星　一八
六　武藏野の路　國木田獨歩　二六
七　本居翁の遺蹟　芳賀矢一　三三
八　本居宣長の母　佐佐木信綱　四一
九　菅公の夫人　山田新一郎　四九
一〇　蜜柑　芥川龍之介　五七
一一　言葉の變遷　佐々醒雪　六五

一二　俳句に就いて　高濱虛子　七三
一三　現代俳句抄　八三
一四　冬青樹　河井醉茗　八六
一五　冬の日記　戸川秋骨　八八
一六　過と惡　貝原益軒　九六
一七　伊達政宗　新井白石　一〇三
一八　ボタンの穴　荻原井泉水　一〇七
一九　潮待つ間　幸田露伴　一一四
二〇　春　前田夕暮　一一七
二一　路傍の草　相馬御風　一二三
二二　帚木　三浦梅園　一二九
二三　獅子と虎と私　今井邦子　一三四
二四　新聞の話　鈴木文史朗　一四三

蘭學事始　杉田玄白　二五六
清淨の國　大町桂月　二六五

附錄

國語假名遣表
常用漢字表
略字表
國字表

……終……

女子新國語讀本　新制版　卷四

口繪參照

永田秀次郎
兵庫縣の人、貴族院議員、青嵐と號し俳句を能くする、明治九年(一八七六)生。

夏
支那古代の國朝(凡そ西暦前二二〇〇—同一七〇〇)。

一　吾人の皇室

永田秀次郎

「吾人の皇室」は吾人の皇室である。決して他人の皇室ではない。他所の皇室ではない。故に、吾人ばかりがこれを讃美したい。吾人ばかりがこれを尊崇したい。さうして、他所の他人などには斷じて手をも觸れしめるものではない。指をもさゝしめるものではない。

夏の諺に曰く、「我が王遊ばずんば、我何を以てか休まん。我が王豫(たの)しまずんば、我何を以てか助からん。」と。かくの如くに、

情緒
情誼
狂れる
キング＝ジョージ　英國先々帝ジョージ五世陛下（西暦一八六五―一九三六）。
ロイド＝ジョージ　英國の政治家、自由黨首領、元首相、西暦一八六三年生。併稱する

我が王、我が王と繰返していふところに、無限の情緒が含まれて居る。「吾人の皇室」と吾人國民との間には、實に父子の情誼がある。その子より見たその父は、非常に尊く且偉いものである。さうして、何となく威嚴があつて狂れ難い。それにも拘らず、又非常に親しく懷かしくて、一日と雖も離れて居ることが出來ない。實に吾人九千萬同胞の精神に宿る「吾人の皇室」なるものは、最も尊嚴にして且最も親愛なるものである。

英國人は曰く「英國に二人のジョージあり。キング＝ジョージ及びロイド＝ジョージこれなり。」と。かくの如く皇室とその臣僚とを併稱するが如きは、我が國民性に於ては實に堪難き不快の言葉である。

「吾人の皇室」は尊嚴である。隨つて、これを英人の如くに無

諂諛
理性
滅却する
流露
批判する
論難する
孔子　名は丘、字は仲尼、子といふのは尊稱、支那周代の聖人（西暦前五五一―四七九）。
天成
守舊者流

雜作に他の物と比較併稱するは、吾人の感情に於て到底忍び難きことである。吾人のこの感情は決して諂諛ではない。又、理性を滅却したものでもない。實に自然の性情の流露である。何人と雖も、その父を以てこれを他人に比較し、批判指摘して論難するを忍ぶことが出來ようか。もしかくの如き行爲を以て「直」なりとなす者があつたならば、必ず孔子に叱られるであらう。吾人は「吾人の皇室」を以て最も尊嚴なりとし、これをその父の如くに崇敬するが故に、決してこれを他の何物とも比較することを好まない。この熱烈なる國民的愛情は實に吾人の天成の特性であつて、以て英人と異なる所以である。

併しながら、吾人は又或守舊者流の如く「吾人の皇室」の尊嚴

仰望する文化生活

平易なる皇室論　永田秀次郎著、我が國の皇室の尊嚴なる所以を平易に說いたもの、大正十年（一九二一）一月刊行。

なる方面のみを知つて、親愛なる方面を遺れ、門を鎖し、簾を垂れ、障子を閉めて、我が親愛なる父を仰ぎ見るの機なからしめるが如きことは、吾人の熱烈なる愛情の到底堪へ能はざるところである。

「吾人の皇室」は吾人の皇室である。尊嚴にして狃るべからざると共に、又親近にして離るべからざるものである。故に、吾人は啻にこれを公儀の上に仰望するのみならず、吾人國民の經濟生活・文化生活の上に、常に吾人の父に親近すること愈深からんことを希望して止まぬのである。

（平易なる皇室論）

北原白秋　名は隆吉、福岡縣の人、詩人、歌人、明治十八年（一八八五）生。

寂び
氣品
九重
賢所
みけはひ

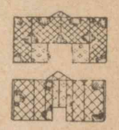
二 菊盛

北原白秋

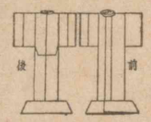
少女たち、黃菊には古代のかをりがある。
純粹に日本の寂びと氣品がある。
ああ、この靜かな菊の香の苑に坐らう。

少女たち、黃菊には九重のみけしきがある。
雲の上の日と月のにほひもする。
わかい帝の御いきづかひが聞える。

少女たち、黃菊には御鏡の明かりがある。
森嚴な賢所のみけはひも澄む。


唐衣

紫宸殿
京都大内裏の正殿、即位の大禮を行はせられる御殿。
黄櫨染
高御座



袍

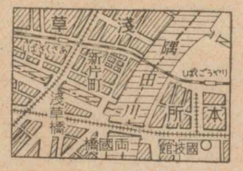
儀仗兵
白秋全集
十八卷、北原白秋の著作を集める、昭和四年（一九二九）九月―昭和九年（一九三四）一月刊行。

皇后宮も白い唐衣でお出ましになる
少女たち、黄菊には紫宸殿の午後が光る。
高御座の金の鳳、玉旒の玉や、青地錦、
かうぐしい黄櫨染の御袍も拜される。
少女たち、黄菊には聖駕の軌みもこもる。
儀仗兵の旗槍もちらちつゞく。
ああ、さうして日本の民族の新しい祝福が來る。

（白秋全集第四卷）

島崎藤村
名は春樹、長野縣の人、詩人、小說家、明治五年（一八七二）生。

隅田川
東京市の中央を南北に貫流する川で、上流を荒川といふ。



水瀨
板子
優に

三文章の道

島崎藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗の無かつた私も、漸く岸を離れる事が出來るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通ふうちには、向かふの河岸まで泳ぎ越す事が出來た。更に又一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃によくも分からなかつた、水瀨の速い遲いも分つて來たし、眞水と潮流のまじり合つたあの川の中の冷たいと溫いとも分かつて來たし、水鳥の樣に浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見る事も出來た。板子無しには溺れる外は無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は普

浮身
抜手
信州の小諸
信濃國（長野縣）、北佐久郡小諸町、信越線の一驛。

通の泳ぎ手が行けるところまでは、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなか〳〵容易でなかつた。私の體は水に重かつたから、樂に浮身の出來る人を見たり、抜手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして「根氣」さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違ない。

信州の小諸に居た頃、私は弓を稽古したことがある。誰でも、最初のうちは、的に向かつて矢を當てることばかりを心掛ける。たゞ當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫ぬくことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ

辨別する
一手揃
焦心する

場所へ飛んで行く。射手の心に賴むところも無く、矢の曲直を辨別する力も無く、さうして、幸に當つた矢は、高慢な煩はしい「熟練」を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ「姿勢」を正す事を私達に教へて呉れた。それからの私達の矢は、假令的を貫ぬく事の出來ないやうな場合でも、一手揃で同じ場所に行くやうになつた。これは文章の道にも當嵌めて見ることが出來る。唯好い文章をばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばならない。

かたはら
掘―堀

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て鍬を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鍬をかついで行つて土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植易いものから作つて見た。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、肥料をかけに行つた。馬鈴薯の花が白くさかりな頃に行つて、試みに土の中を探つて見るとはや圓いのが幾つも〳〵根元の方から出て來た。豌豆の蔓が長く伸びて、人の背よりも高く絡みついた畠の中には、嫩かく生つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうにな

痛切に
嚴肅な
淺草　東京市淺草區。
新片町　淺草區の最南部にある。（七頁の地圖參照）
淺草橋　神田川の下流に架した橋。（地圖參照）
兩國橋　隅田川に架した橋、日本橋區から本所區へ通ずる。（地圖參照）
界隈

つた。それから、私は、周圍にある耕地を見て廻り、本當の農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私は、ある耕地を通つて、非常に嚴肅な念に打たれた事を、今でも能く思ひ出すことが出來る。われ〳〵が文章の手本とすべきものは、何程われ〳〵の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならない。「試みる」といふことは「悟る」といふことの初である。

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界隈を漕廻つたことがある。最初のうちは

傳馬

弄する
表白
結晶
飯倉だより
島崎藤村著、感想集、大正十一年（三五八）九月刊行。

無暗と手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し、手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に、私は、手足を動かすことが少くて、身體全體の力でゆつくりと櫓を押すことが出來るやうになつた。向かふから大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝當らないやうにと、さう思つて漕いで行く樂しみなども、それから起つて來た。その後、船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある。「簡素」の美がある。文章の道にも、無暗に筆を弄することが決して自己の眞の「表白」とはならない。眞に好い文章には、眞に好い「結晶」の力がある。

（飯倉だより）

薄田泣菫
名は淳介、岡山縣の人、詩人、隨筆家、明治十年（一八七七）生。

江西詩社
黄庭堅を祖とする漢詩の一派。

黄山谷
黄庭堅、字は魯直、山谷は號、支那宋代の詩人（西暦一〇四五―一一〇五）。

晦堂老師
黄堂寺住職。

久闊を敍する
をはる

四 木犀の香

薄田泣菫

「いゝ匂だ。木犀だな。」

私は、緣端にちよつと爪立をして、地境の板塀越しに、一わたり見える限の近處の植込を覗いてみた。だが、木犀らしい硬い常綠の葉の繁みは、どこにも見られなかつた。この木の花が白く黄いろく咲盛つた頃には、一二丁離れたところからでも、よくその匂が嗅ぎつけられるのを知つてゐる私は、それを別にいぶかしくも、また物足りなくも思はなかつた。

名高い江西詩社の盟主黄山谷が、初秋の或日、晦堂老師を山寺に訪ねたことがあつた。久闊を敍しをはると、山谷は、待ちかねたもののやうに、

つかぬこと

吾隱スコト
「二三子、我ヲ以テ隱スト爲ス、吾隱スコト無シ。」論語述而篇にある孔子の言葉。

意見を叩く

もて扱ふ

「時につかぬことをお尋ね申すやうですが……」

といつて、「吾隱スコト無シ。」といふ語句の解釋について、老師の意見を叩いたものだ。この語こそは、山谷が、その眞義に徹しようとして工夫に工夫を重ねたが、どこかにまだはつきりしないところがあるので、もて扱つてゐたものだつた。

晦堂は、客の言が耳に入らなかつたものの樣に、何とも答へなかつた。寺の境内はひつそりとしてゐた。あたりの木立を透かして、そよ〳〵と吹入る秋風の動きにつれて冷々とした物の匂が、開け放つた室々を、腹這ふやうに流れて往つた。

晦堂は靜かに口を開いた。

「木犀の匂をお聽きかの。」

山谷は答へた。

搏力

脈々と

「はい、聽いてをります。」

「すれば、それがその――」

晦堂の口もとに微笑の影がちよつと動いた。

「吾隱スコト無シといふものぢやて。」

山谷はそれを聞いて、老師が卽答のあざやかさに心から感歎したといふことだ。

ふと目に觸れるか、鼻に感じるかした當座の事を捉へて、難句の解釋に暗示を與へ、行詰まつてゐる詩人の心境を打開して見せた老師の搏力には、さすがに感心させられるが、しかしこの場合、一層つよく私の心を牽くのは、寺院の奥まつた一室に對坐してゐる老僧と詩人との間を、煙のやうに脈々と流れて往つた木犀のかぐはしい呼吸で、その呼吸こそは、單に花木

高逸閑寂な
心像
交錯する
默語する
ぢゞむさい
くゆらせる
香爐
闌ける

の匂といふばかりでなく、また實に秋の高逸閑寂な心そのものより發散する香氣として、この主客二人の思を淨め、興を深めたに相違ないといふことを忘れてはならぬ。

草木の花といふ花が、時にふれ、折につけ、私達の心像に殘してゆく印象は、それ〴〵の形と色と光との交錯したものに外ならないが、ひとり木犀は、その高い苦味のある匂によつてのみ、私達にその存在を默語してゐる。木犀の花は、ぢゞむさく、古めかしい、金紙・銀紙の細かくきざんだのを枝に塗りつけたやうな、何の見所もない花で、言はばその高い香氣をくゆらせるための質素な香爐に過ぎないのだ。

秋がだん〴〵闌けゆくにつれて、紺碧の空は日ましにその深さを增し、大氣はいよ〴〵その明澄さを加へてくる。月の

冷徹
漂渺たる
薫蒸する
たゆたふ
薫化する
獨樂園
薄田泣菫著、隨筆集、昭和九年三月九日四月刊行。

光は宵々ごとにその憂愁と冷徹を深め、蟲の音もだん〴〵とその音律が磨かれてくる。かうした風物の動きを强く深く樹心に感じた木犀が、その老いて若い生命と漂渺たる想とをみづからの高い匂にこめて、十月末の靜かな日の午過ぎ、そのしろがね色の、またこがね色の小さな數々の香爐によつて、燃燒し、薫蒸しようとするのだ。匂は木犀の枝葉にたゆたひ、匂は木犀の東にたゆたひ、匂は木犀の西にたゆたひ、匂は木犀の南にたゆたひ、匂はまた木犀の北にたゆたひ、はては靡き流れて、そこともなく漂ふうちに、あたりの大氣は薫化せられようといふものだ。さうして、草の片葉も、土にまみれた石ころも、やがてまた私の心も……。

（獨樂園）

（筆堂、玉合川）　秋深

五　秋深い日

室生犀星

旅行をしてゐると、秋が來て、それがだん〳〵深くなるのが、一日づゝ眼にとまつて來る。

ことに永い夏の旅住居から秋になると、著しく心にさびしさを感じる。朝ごとに庭を掃くと、落葉のあひだに、赤蜻蛉や蝶の弱つてゐる姿を見かけるし、そんなことで日增しに深くなる秋が感じられる。或朝なぞ、どういふ小鳥だかわからないが、脫毛が一本、柴のうへに落ちてゐた。脫毛は尾の羽根らしく、明方に渡る小鳥が落して行つたものであらう。手に取つてみると、灰色と薄墨色とがぼやけた斑點をつくつてゐた。一本の羽根にもていねいな造化があり、誰がしたといふこと

室生犀星
名は照道、金澤市の人、詩人、小說家、明治二十二年（一五四九）生。

ぼやける
造化

この信州の山里
輕井澤である。

もないところに有難さがあつた。

この信州の山里は風がすくないので、風の音があまりしない。穏かで靜まり切つたなかで秋が刻まれる。畑の胡瓜をみんな食べてしまひ、から〳〵になつた棚や添竹をとりのけると、その枯葉の下に一杯のこほろぎが潜んでゐて、驚いてばらばらとあたりに跳び出す。眼の玉がぴか〳〵に光つてゐるのが、朝日にちらつく。さうして、あたりに散らばつた落葉の上に跳ぶものだから、あちらでもこちらでも淋しい音がする。こほろぎらしくない大きい音のやうに聞える。

何處かに人の話聲が大きく聞える。すぐ近いところのやうであるが、ずつと向かふの、町はづれでしやべつてゐるらしいのだ。今朝はじめて霜が降つたと言つてゐる。さういへ

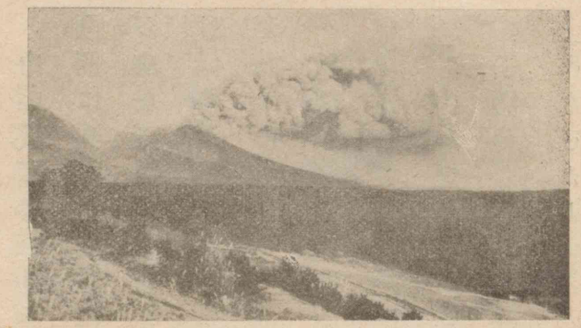
ば、今朝寒暖計を見ると四十八度しかなかつた。昨夜の寒さがはじめてわかつたやうな氣がした。

畑の茄子もついでに引く。

干割れた固い茄子があちこちの枝のさきに實のつてゐる。芥子漬にするのだと、妻がいふ。茄子はかれこれ目籠に一杯あつた。

妻と女中が枯枝をさがしに裏山にのぼつてゆく。昨夜の風で古い枯枝が木の間から落ちたのだ。女たちは突然大きな叫び聲をあげて驚く。その聲の方に眼をやつて見ると、山鳥が一羽、木の間からばた〳〵と立つて行く。

渡り鳥がこの間から毎朝つゞいて空に群をつくつて渡つてゐた。胡麻粒を撒いたやうに美しかつた。何百といふ小


淺間山

鳥が一どきに囀り、羽根が風のやうに鳴り廣がるかとおもふと圓をちゞめて行つたりした。その速いことは瞬きするまに見えなくなつてしまふ。

渡り鳥が來ると東京では茶の花が咲くころである。

この信州では紫苑が咲き、茅の穂がぼう〳〵になり、落葉松の針葉が散りはじめる。落葉松の枯葉は、帽子や著物の袂や障子の棧や疊の目まではいりこむ、それほど細かい。風呂桶の水に浮いてゐるのを見ると、信州の秋深いことが肌に感じられ

淺間山　長野・群馬兩縣に跨る活火山、海拔二五四二米。

上州　上野國（群馬縣）。

た。

白い淺間砂のうへに、落葉松の枯葉が粉のやうに、道ばたの兩側に吹きよせられる。すこし風があると、風のなかに枯葉が幽な栗いろを見せて散るのが見えた。その目にはいるかはいらないくらゐ幽なのが、淋しいといふよりも微妙な景色であつた。

秋深い日の淺間山はよく晴れて、優しいまんまるい肩をそびやかしてゐた。

「お山が煙草をのんでゐるわよ。」

子供がさういふほどの、幽な穩な噴煙を、今朝は上州の空の上になびかしてゐた。煙草のやうに白つぽく淡々しい煙であつた。

挽臼

うど

茶微塵

去年とその前の年は、終日挽臼を廻すやうにごろ〳〵山鳴りがしてゐた。時々、砂がうどの木の廣葉の上に黑々と溜つた。東京から來た避暑客の若い女たちは、その燒砂をあつめて紙にくるんで、都に持つてかへつて行く程であつた。

だが、今年は夏から一度も爆發もしなければ、噴煙も極めてすくなかつた。まんまるい山肌は、秋になつて裾野の方からだん〳〵茶微塵の著物のやうな色になり、それに、このごろは濃く紅葉した朱の色が雜つてゐた。もう一度その色が灰ばんで紅葉が散つてしまふと、間もなく冬が訪れて來るのであつた。山肌はまるで磨いたやうな新雪に粧はれるのだ。

今朝、裏山の高い落葉松の枝をちよろ〳〵這ふものがゐるので、よく見ると茶色をした栗鼠であつた。ちよろ〳〵這う

啄木鳥

てゐると鈍いやうであるが、少しも眼をはなさずにゐても、あまり速く枝を移つて行くので、栗鼠の姿よりも枝の動くのが眼にはいるくらゐであつた。落葉松から櫟の枝にうつり、枝の裏側に廻つた處で見失うてしまつた。あとは森としてゐて、啄木鳥がかん〳〵……と木の幹を叩いてゐるばかりである。もちろんどこにゐるか姿は分からない。唯、木の幹をくちばしで叩く音がまつすぐに落ちてくる。靜かだ。

向かふの林でクヰ、クヰ、クヰヰ、……と鵙の聲がする。まるで高原一杯にその聲がひゞく。鵙といふ鳥は、きまつて枯枝にきよとんと止つて、二三度啼くと、それきり何かにびつくりしたやうに飛んで行つてしまふ。

米は裏庭で焚くのだが、今日は風がないので煙が庭の木の

間を罩める。飯の匂がまじつてくる。枯木のくすぶる匂のひま〳〵に、飯がだん〳〵烈しく焦げてくるやうに匂ふ。かぐはしくてよい。

「飯が焦げてゐるよ。」

女中は座敷を掃いてゐるので、大きな聲で、はあい――と言つて裏庭へ行き、薪を引いてゐる。飯は薪で焚くと、ふつくりと一粒づゝふくれあがつて、つや〳〵したつやをもち、心から柔くほた〳〵にうまくなる。東京では瓦斯で焚くのであるから、こんな白い頰の樣な飯はとても食べられなかつた。

それに山里で水が冷たく美しいから、豆腐がうまかつた。石桶に筧の水がしたゝり、豆腐は絶えず代へられる水のなかで、冷えて、生きてゐるやうに底の方に沈んでゐた。

（文藝林泉）

文藝林泉
室生犀星著、隨筆集、昭和九年（一九三四）五月刊行。

國木田獨歩
名は哲夫、千葉縣の人、小説家、明治四十一年（一九〇八）歿、年三十八。

武藏野
關東平野の一部、武藏國（東京府・埼玉縣及び神奈川縣の一部）の平野であるが、廣義には越市以南、東京府中まで、玉縣川の間に擴がる原野を指す。

六 武藏野の路

國木田獨歩

武藏野に散歩する人は、路に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも、足の向く方へ行けば、必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美は、たゞ縱橫に通ずる數千條の路を當もなく歩くことによつて、始めて獲られる。春・夏・秋・冬・朝・晝・夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞこの路をぶらぶら歩いて、思ひつき次第に右し左すれば、隨所に我等を滿足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分はしみ〴〵感じてゐる。武藏野を除いて日本にこのやうな處が何處にあるか。北海道の原野には無論のこと、那須野にもない。その外どこにあるか。

那須野
栃木縣の北部、那珂川の上流及び箒川沿岸の廣漠たる平野。

林と野とがかくもよく入亂れて、生活と自然とがこの樣に密接してゐる處が何處にあるか。

武藏野

されば、君若し一の小路を行き、忽ち三條（すぢ）に分かれる處に出たなら、困るには及ばない。君の杖を立てゝ倒れた方へ行き給へ。或はその路が君を小さい林に導く。迷はず行き給へ。林の中程に到つて、又二つに分かれたら、その小さい路を選んで見給へ。或はその路が君を妙な處へ導く。それは林の奥の古い墓地で、苔蒸す墓石が四つ五つ並んで、その前

叢(又)
杜—森
小春

に少しばかりの空地があつて、その横の方に女郎花など咲いてゐるかも知れない。頭の上の梢で小鳥が鳴いてゐたら、君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んで見給へ。忽ち林が盡きて、君の前に見渡しの廣い野が展ける。足許からすこしだら〳〵下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つてゐる。萱原の先が畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、その林の上に遠い杉の小杜(もり)が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つてゐて、雲の色に紛ひさうな連山がその間に少しづゝ見える。十月小春の日の光が長閑に照り、小氣味よい風がそよそよと吹く。若し萱原の方へ下りて行くと、今まで見えた廣い景色が隱れてしまつて、小さい谷の底に出るだらう。思ひがけなく、細長い池が萱原と林との間に隱れてゐたのを發

見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮に映してゐる。水の邊には枯蘆が少しばかり生えてゐる。この池の邊の路を暫く行くと、又二つに分かれる。右に行けば林、左に行けば坂、君は必ず坂を上るだらう。とかく武藏野を散歩するのに、高い處〳〵と選びたくなるのは、何とかして廣い眺望を得たいと求めるからで、それでゐて、その望は容易に達せられない。見下すやうな眺望は決して求められない。それは初から諦めたがいゝ。若し君が何かの必要で路を尋ねたく思ふなら、畑の中にゐる農夫に訊き給へ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲を揚げて尋ねて見給へ。驚いて此方を向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女(をとめ)であつたら、近づいて小聲で訊き給へ。若し若者であつたら、帽子を取つて

大樣に

すげなく

黃葉—紅葉

慇懃に問給へ。大樣に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖だから。教へられた路を行くと、路が二つに分かれる。教へてくれた路は餘りに小さくて、少し變だと思つても、そのままに行き給へ。突然、農家の庭先に出るだらう。果して變だと驚いてはいかぬ。その時、農家で尋ねて見給へ。「門を出るとすぐ往來ですよ。」と、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると、果して見覺えのある往來だ。なる程これが近路だなと、君は思はず微笑をもらす。その時、始めて、教へてくれた路の有難さが解るだらう。眞直な路で、兩側とも十分に黃葉した林の四五町も續く處に出ることがある。この路を獨り靜かに歩むのはどんなに樂しからう。右側の林の頂は、夕陽鮮に輝いてゐる。折々落葉

山鳩

妙

の音が聞えるばかり、四邊はしんとして、いかにも淋しい。前にも後にも人影が見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉の落盡くした頃ならば、路は落葉に埋れて、一足毎にがさがさと音がする。林は奥まで見透かされ、梢の先は針のやうに細く蒼空を指してゐる。猶更人に遇はない。愈淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、時に一羽の山鳩の遽しく飛去る羽音に驚かされる。同じ路を引返して歸るのは愚である。迷つたところが、今の武藏野に過ぎない。まさかに行暮れて困ることもあるまい。歸りもやはり凡その方角を定めて、別の路を當もなく歩くが妙。さうすると、思はず落日の美觀を獲ることがある。日は富士の背に落ちようとしてまだ全く落ちず、富士の中腹に群る雲は黃金色に染まつて、見るが

暗澹たる

沁—泌

山は暮れて

谷口蕪村の句。

武藏野

國木田獨歩著、小品集、明治三十四年(一九〇一)三月刊行

よもすがら

獨歩はこの歌を「武藏野」の中に引いて、武藏野の冬の生活をして見てこの歌の心が分かつたと言つてゐる、熊谷直好は近世末期の歌人、「浦のしほ貝」はその家集である。

中に樣々の形に變ずる。連山の頂には白銀の鎖の樣な雪が次第に遠く北に走つて、終に暗澹たる雲の中に沒してしまふ。日が落ちる。野には風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れようとする。寒さが身に沁む。その時は路を急ぎ給へ。顧みて思はず新月が枯林の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹落しさうである。突然また野に出る。君はその時「山は暮れて野はたそがれの薄かな」の名句を思ひ出すだらう。

(武藏野)

よもすがら木の葉かたよる音きけばしのびに風の
かよふなりけり

(熊谷直好—浦のしほ貝)

芳賀矢一

福井市の人、國文學者、文學博士、昭和二年(一九二七)薨、年六十一。

早稻田

晩稻田

喬松

山室

三重縣飯南郡花岡村。

爪先上り

七 本居翁の遺蹟

芳賀矢一

薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺め行く樂しさ。早稻田は既に刈盡くしたが、晩稻田は金色に波立つて、豐年の喜を見せてゐる。一里以上の路を往復するらしい一年生くらゐな小兒の連立つて行くのも、勇ましく心地よげに見える。尾花や野菊の交つてゐるまばらな小松原の路を通つて、やがて喬松の亭々と聳えた山の麓を過ぎる。あの山は何、この山は何、「御墓はあそこの山の茂みの所です。」と車夫の語るのを聞きながら、何時しか山室に著いた。

車を捨てて爪先上りの坂路を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都に馴れた目や耳には清らかに珍しい。

本居宣長像

九十九折

石磴

社殿

この墓側に山室山神社があつたが、明治二十三年（一八九〇）殿町に遷した。（四〇頁參照）

平田篤胤

出羽國（秋田縣）の人、國學四大人の一、天保十四年（一八四三）歿、年六十八。

杉・松・しひなどで小暗い路を凡そ四五町も上つた所に、淨土宗の寺がある。妙樂寺と言つて、翁には深い關係のある寺である。それから、右へ左へと九十九折を喘ぎ〳〵六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上、二三十坪くらゐが平地になつてゐる。その中央の小高い盛土が卽ち翁の墓である。上に櫻の木が一本「本居宣長之奥墓」と題した墓石がある。社殿も何もない。翁の墓の左手に圓い石があつて、平田篤胤大人の

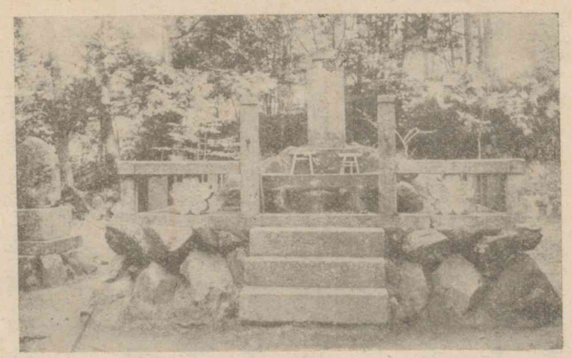
なきからはいづくの土になりぬとも魂はおきなのもとに行かなん

と、刻んだのが立つてゐる。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられた事は

懇請する
選定する
珍藏する
し む
風に知られぬ花
後 進

ない。しかも、數多の門弟子のうちで、ひとり翁の傍に侍つてをられるのは、さぞかし滿足な事であらうと思ふ。この墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して、生前に選定して置かれたのである。その承諾を喜んで住僧に宛てられた手紙は、今尙同寺で珍藏してゐる。



本居宣長の墓

やま室の山の千年のやどしめて風に知られぬ花をこそ見め

と詠まれたのはこの時である。二十年來、一日として翁の書物を讀まぬ事のない後進の一書生

かずまふ

卓絶な
永劫に

見はるかす
志摩
三重縣の東南端。
三河
愛知縣の南半。
尾張
愛知縣の北半。
松阪町
現松阪市。
奥城

が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。

百歳の世は隔つれど教へ子にかずまへませと拜み額づく

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。その著書の卓絶な學術上の價値と、偉大な感化力とは、未來永劫に、歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業ほど偉大なものはない。

この墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類がない。青々とした伊勢の海を見はるかして、志摩・三河・尾張などの崎崎、山々、近くは松阪町を眼下に見る。「富士の山も何時もは丁度あのあたりに見えます。」と、ホテルの主人は指さした。千古に卓越した偉大な學者の奥城としては、誠にふさはしい場所

檀那寺

鈴屋遺蹟保存會
保存會の建物は松阪市の西部の丘陵にある、鈴屋は翁の號。

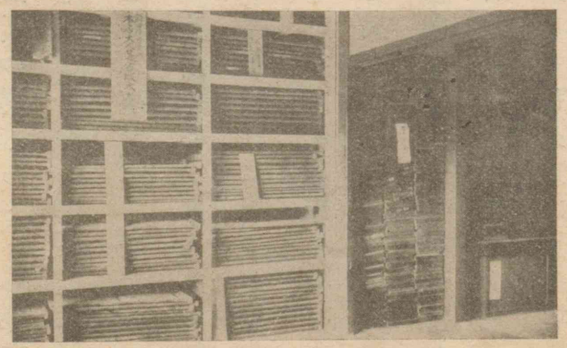
遺愛

稿本

である。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。此所の眺望も誠に美しい。元來、翁の祖先の檀那寺で、翁はをり〳〵此所に遊ばれたのである。

松阪へ歸つて城址の公園に行く。此所に鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまゝで保存されてゐる。又新しい倉庫には、翁の自筆の草稿、遺愛の物、醫業用の藥箱なども陳列されてゐる。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁



本居宣長著述書木版の一部

襟を正す

魚町　松阪市。

舊態　本居清造　今の戸主、翁五世の孫、明治六年（一八七三）生。

抽斗

が四十餘年の勤勉篤學、人をして襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中は火災の虞もあるから、保存會でこの舊城址の一角に移したのである。併し、庭の樹木置石迄一切舊態を存する樣苦心したといふ事で、本居清造といふ表札まで、そのまゝになつてゐる。臺所のかまども、井も、便所も、舊のまゝの形が遺されてゐる。下が抽斗になつてゐる小さい梯子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段に繫がれて懸つてゐる。（これは模造品で、本品は陳列庫にある。）これが卽ち翁が一切の著書を述作された場所で、この四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓から射しこむ夕日は、さぞ堪難かつたらうと思はれて、この質素な家居の樣が、愈翁の人格を

ワイマール　ドイツの一都會。

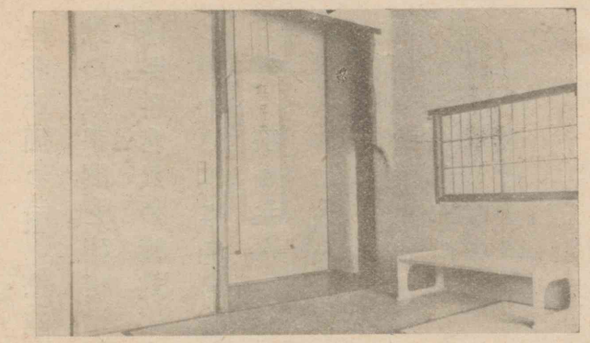
ゲエテ　ドイツの大詩人（西暦一七四九―一八三二）。

シルレル　ドイツの詩人（西暦一七五九―一八〇五）。

豁然

パノラマ　野外高所から四方を展望するのと同じ感覺を與へる寫生的繪畫を裝置したもの。

大ならしめる。ドイツのワイマールでゲエテやシルレルの舊宅を見た時にも、その偉大な事業と、その質朴な家居の狀態との對比を面白く感じたが、この鈴屋の遺蹟には、一層その感を深うした。ゲエテ、シルレルの舊宅を見た時には、日本にもかういふやうに偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが實行されて、先づこれを翁の舊宅に見る事を得たのは、誠に悅ばしい事である。



本居宣長の書齋

この公園は四望豁然、パノラマを見る樣で絕景であるが、翁

山室山神社
今は本居神社といふ、松阪殿町。
大手門
瑞籬
返り咲
東郷大將
東郷平八郎、鹿兒島縣の人、元帥、海軍大將、侯爵、昭和九年（一九三四）薨、年八十八。
ゐる
筆のまに〳〵
芳賀矢一著、隨筆紀行集、大正四年（一九一五）五月刊行。

の遺蹟を移して、更に崇高な威嚴を加へた。我が國に翁あるは我が國の誇。松阪町民の誇は、翁の遺蹟に越した物はない。城の大手門を出でて數十歩、縣社山室山神社がある。社殿、瑞籬が神宮風の樣式であるのは、一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返り咲をしてゐる。宿の主人の話に、先年東郷大將の來られた時も返り咲を見られて、「流石に本居翁の郷土故、櫻は一年中咲くのだらう。」と言はれたといふ事である。

さくら木にゐりし百千の卷々ぞ風に知られぬ花にはありける

（筆のまに〳〵）

佐佐木信綱
號は竹柏園、三重縣の人、歌人、國文學者、文化勳章拜受者、文學博士、明治五年（一八七二）生。
刀自
寶永二年
紀元二三六五年。
明和五年
紀元二四二八年。

八 本居宣長の母

佐佐木信綱

偉人の後には賢い母があるといふ事實を最もよく示してゐる例は、德川時代の諸學者の傳に多くこれを見るが、中でも最も著しいのはわが本居宣長の母刀自であらう。自分はここに宣長の母勝子刀自について些か語つて見よう。勝子は、寶永二年四月十四日、伊勢國松阪新町の村田孫兵衞豐商（とよあき）の四女として生まれ、享保十三年、二十四歳で小津三四右衞門定利の妻となつて、二男二女を生んだ。その長男が宣長である。元文五年三十六歳の時に夫におくれ、明和五年正月朔日、六十四歳で世を去つた。

小津家は松阪の舊家で、江戸に出て木綿問屋を營んでゐた。

手代

大傳馬町
今の東京市日本橋區内。

子女

手足を出す術

自失する

宣長の曾祖父・祖父相次いで商業が大いに榮え、父三四右衛門之をうけついで熱心に業務に從つたが、手代のために誤られて資産を失ひ、三四右衛門は四十六歳の七月に江戸大傳馬町の店で病歿した。

三四右衛門の死は、いふまでもなく小津家卽ち本居家にとつては大災厄であつた。養嗣子定治は江戸にあつたが、それもまた數年の後に世を去つた。遺産とては僅かに四百兩あつたが、それも親戚に保管されて、僅かにその利子が給與されるだけであつた。この間にあつて、勝子は、一家の生計を維持すると共に、宣長を始め子女の教育を全うしなければならなかつた。尋常の婦人ならば殆ど手足を出す術も知らないで、茫然自失すべき窮境であつたのである。ところが、勝子は、些

先見

時宜を得る

未曾有寄與

純然たる

かの狼狽もせず、細心な思慮と明敏な判斷とを以て、雄々しくも一家の經營に當つた。

こゝに特に勝子の大先見と稱すべきは、その宣長に對する明察と、時宜を得たその教育の態度とである。このことがあつて始めて我が宣長をして宣長とならせたもので、勝子の賢明は、よく本居一家を危急の間に全うするを得させたばかりでなく、更にまた、本居宣長といふ一大學者を生ぜさせて、日本の國家及び日本の學界に、未曾有の寄與をなさせたのである。賢母の功績もまた偉大であるといふべきである。

何をか勝子の明察といふ。それは、彼女が、宣長は到底商人となるべきものではないといふ事を見拔いて、彼をして學者とならせ、以てその天分を成させようとし、而も純然たる學者

元手
烱眼

寶暦二年
紀元二四一二年。

堀景山
名は正起、儒者、安藝（廣島縣）侯の臣、寶暦七年（三四一七）歿。

武川幸順
號は南山、山城國（京都府）の人、醫者、安永九年（三四〇）歿、年五十六。

留學後顧の憂

の生活の困難な事を知つて、生活の元手を得る爲に、醫師とならせようとした事である。よくその子を見拔いた烱眼と共に、また生計の點にも十分に心を用ひた勝子の先見と、悠々思慮を盡くしたその態度とは、眞に及び易からずとすべきではないか。

寶暦二年、宣長が二十三歳の春、勝子は宣長を京都に留學させた。宣長は京都に上つて、まづ堀景山に就いて儒學を學び、後に武川幸順に醫を學び、五年四箇月間留つた。この五年餘の留學が、やがて宣長の學問の上にも、また生活のためにも基礎となつて、宣長をして後年の宣長とならせたことは、宣長の傳に於ける明白な事實である。この五年間餘、宣長をして何等後顧の憂がなく、また、都會生活にありがちな數多の誘惑に

支辨する

そもじ殿事扨〳〵あんじ申候ながなが敷事はいらぬ事くどふも〳〵一大事候おやをたて申さるゝうへは何事も中まではなく候へども心へ有そふな事と存候くれぐれ頼入候此文屆候より後はさかづきに三つより外うへつゝしみ申さるべく候くれ〴〵此義頼入候めで度

かしく

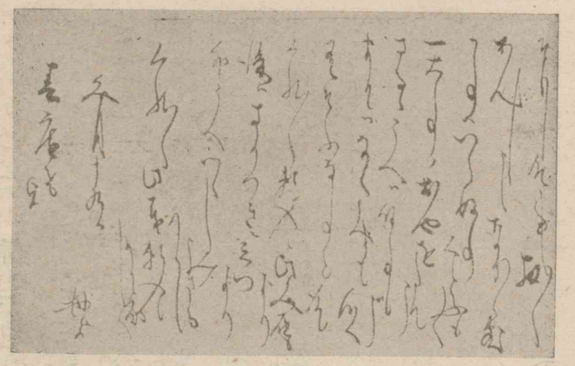
母より

文月十九日
春庵老參る

苦心慘憺する
憺―膽―澹
處理する

も陷らずに、十分勉强することを得させたことは、全く勝子の苦心と激勵との結果であつた。

さうでなくてさへ、困苦の中から宣長を留學させて、學費を支辨し、又、一家の經濟を立てて行く勝子の苦心は、決して一通りではなかつた。勝子は、或は家財を賣り、或は親戚から借錢をなし、苦心慘憺してこれを處理した。而も、彼女はその子に對して、例へば、會ひたい情をも忍んで歸鄉を延ばさせようとしたやうに、もとより節約を要求こそはしたれ、必要の費用に對しては、常



本居勝子の書簡

愚痴がましい
雙肩にかゝる家運挽回
妙諦
隨分

に事を缺かさずこれを給して、決して愚痴がましいことをいはなかつた。併し、自分の苦心は或程度まで打明けて我が子を誡めた。さうして、宣長の日常生活につき、また勉強については、絶えず激勵し、その上、宣長の雙肩にかゝつてゐる家運挽回の大責任についても、自覺させることを忘れなかつた。或は大酒を戒め、或は食物に用心し、或は寢冷に氣を付けるなどは、勿論一般の母親氣質であらうが、我が子に對するその激勵と啓發との態度に至つては、眞に大なる教育の妙諦を得たものといはなければならぬ。勝子が宣長に與へた書翰の一つに、

「偖、何かと心づけ候へども、入用多く苦勞致し申し候。隨分隨分無事にて、心強く思ひ、外の儀に心移し申さず、唯々

そもじ
心にしむ
大文字
感應する

一筋に醫者の方心掛け、申すまでは無く候へども、人間心一筋を強く道々を專一に成さるべく候。此所をそもじ取損ひ取外し申され候はば、いつも〳〵申す通り、一人の母此の世より迷ひ申すべく候。其の上、父母・先祖の跡の所よく〳〵心にしめ、專一に守り申さるべく候。人々そもじ事褒居り申し候へば、此所取損ひ候はば、親の恥は申す樣なく、大不孝と存じ候。」

とあるが如きは、この點に關して最も敬重すべき大文字である。

勝子が當時の斯樣な賢慮と苦心とは、素より、俊秀の子である宣長に感應せずにはゐなかつたに相違ない。併し、當時勝子から送つた書翰は數十通も殘つて居るのに、宣長から對へ

賀茂眞淵と本居宣長　佐佐木信綱著、賀茂・本居の二大國學者の傳記・學問に關する論文集、大正六年（一九一七）五月刊行。

たものは遺憾ながら殆ど傳はつて居らぬ。隨つて、勝子の心盡くしが、いかに宣長の心に反應したかは之を知り得ないが、併し、その反應の效果を明瞭に吾人に語る大なる事實がある。それは宣長の學者としての成功である。宣長をしてかやうな國學上の偉人とならせた素因は、多く之を勝子の人格に求めるべきである。宣長の學問と事業とを歎美するにつけても、吾人は必ず勝子の賢明を忘れてはならぬ。

いかなる國、いかなる代にも、總べての方面に渉つて最も必要とするところのものは大人物である。さうして、大人物を生ぜさせるには、その母が賢明でなければならぬ。吾人は今に於て、勝子を偲ぶ情が殊に切である。

（賀茂眞淵と本居宣長）

山田新一郎　福岡縣の人、元北野神社宮司、元治元年（一八六四）生。

北野天滿宮　官幣中社北野神社、京都市上京區にある。

菩提寺　寄寓する

昌泰二年　紀元一五五九年。

醍醐天皇　第六十代、御名は敦仁、延長八年（一九三〇）崩御、御年四十六。

有數な

九　菅公の夫人

山田新一郎

菅公の夫人は京都の北野天滿宮の一座として祀られてゐる。夫人は菅公薨去の後には、住むべき家もなくなり、吉祥院といふ菅原家の菩提寺の一室に寄寓してをられたので、普通に吉祥女と稱へられてゐる。昌泰二年夫人の五十の賀の折、醍醐天皇がわざ〳〵祝賀の敕使をお遣はしになつて、從五位下を――後には從四位下まで昇進せられたが――お授けになつたといふ外には、夫人の傳記は多く傳はらないが、當時有數な賢夫人であつた事は考へられる。菅公の御子方はなか〳〵大勢であつたが、上の方の御子方は、四人までも菅公と同時に諸國に流された程、そろつて相當な位置に出身された所から

延喜元年
紀元一五六一年。
太宰權帥
帥―師
左遷す
なわすれそ

木ずゑ。
かへり見しはや

琴瑟の情

見れば、その訓育の功は、公一人だけには歸せられまい。夫人の内助も與つて力のあつた事と思はれる。

延喜元年一月二十五日、菅公が、俄に太宰權帥に左遷されて、二月一日都を立つて行かれる時、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ

と詠まれたのは、梅花に寄せて最愛の夫人に別れを惜しまれたものとも言はれよう。西遷の途すがらも、都への便りにことづけて、

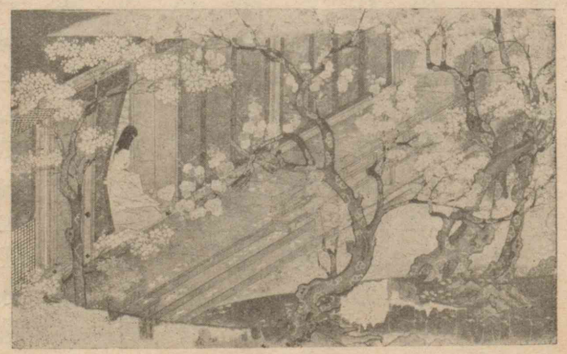
君が住む宿の木ずゑを行く〳〵もかくるゝまでにかへり見しはや

と盡きぬ名殘を惜しまれたのも、卽ち、この夫人に對してであつた。もつてその琴瑟の情もしのばれるのである。

掃撤ス

雪押竹

夫人が京都の留守邸に於ける佗住居の樣子は、菅公の作られた太宰府の詩で多少窺はれる。公が太宰府で衣食住共に缺乏し、悲慘極まる二箇年の月日を送られたに較べて、京都の方もまた劣らぬ境遇であつた事が想像される。菅公の太宰府で詠まれた詩のうちに、「雪夜家竹ヲ思フ。」と題して、「家僕ハ早ク逃散シヌ。寒ヲ凌ギテ誰カ掃撤セン。」といふ句があつて、留守宅では下男も逃げた樣子だが、雪押竹の雪を拂ひ除ける者もあるまいと、故郷の事を氣遣つてをられる。



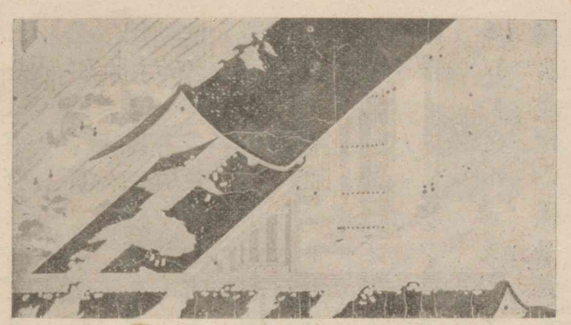
菅　公（松ケ崎天神縁起）

去年ノ今夜
去年ノ今夜清涼ニ侍ス、秋思ノ詩篇獨リ斷腸、恩賜ノ御衣今コヽニ在リ、捧持シテ毎日餘香ヲ拜ス（「重陽後一日」）。

一朝にして食祿

權門

この詩は延喜元年卽ち「去年ノ今夜」の詩を詠まれた年の冬の作である。一朝にして右大臣を罷められ、食祿に離れ、しかも、大臣暮しで育つた御子たちは大勢ある。留守居の夫人の苦勞が一通りや二通りでなかつた事は、申すまでもあるまい。こんな困難な家、しかも、お咎めを蒙つた菅家の事であれば、はしたない下男どもも早々に逃出して權門に走つたものと思はれる。夫人は、かゝる困難を凌いで、御子方相手に留守を守つて公の歸洛の日を待ち、氣丈夫に家政を齊へ、夫を大事に思つてをら



菅家の門（松ケ崎天神緣起）

躍如として

便風

れた事は、更に次に引く菅公の太宰府に於ける詩に躍如として表れてゐる。これも延喜元年冬の作と思はれるが「家書ヲ讀ム。」と題していはく、

消息寂寥タリ三月餘。
便風吹著ク一封ノ書。

三月餘りも都の便りが絶えて、甚だ寂しく感じたが、今日はいかなる吉日ぞ、東の風が我が家の手紙を吹きつけて來た、嬉しい事である。

西門ノ樹ハ人ニ移シ去ラレ、

これから以下の四句は、夫人の送られた手紙の內容を詠まれたものである。右大臣家の表門內であれば、松か梅か立派な樹が植ゑてあつたであらうが、今はそれを人が持つて行つ

米鹽の代

天神御所
公の屋敷址を後世天神御所といふ。

寵遇
斜ならず

配煎

たとある。多分米鹽の代に賣つたか、取られたかしたのであらう。

北地ノ園ハ客ヲ寄居セシム。

天神御所の北地と言へば紅梅殿であらう。客を寄居せしむとあるから、借家か下宿に出されたものと見える。庭木の賣食に下宿業。これが昨日まで右大臣として天皇の寵遇斜ならなかつた菅公の夫人の生計の有樣である。太宰府の菅公はどんな心持でこの手紙を讀まれたであらうか。

紙ニ生薑(シヤウガ)ヲツツンデ藥種ト稱シ、

昔の草根・木皮の藥には、生薑の配煎が必要とされたのであるから、いはゞ生薑は家庭衞生の必要品である。「たまに生薑が手に入りましたから、不時の用にと紙に包んで貯藏して置

苟もせぬ

齋儲

總菜

神饌

千言萬句

凜乎たる

百難を排する

藥餌

齊家

きました。」困難のうちでも一物も苟もせられぬ夫人の用意の程が知られる。

竹ニ昆布ヲ籠メテ齋儲(サイチヨ)ト記ス。

内のお祭のお供物も十分には辨じかねる境遇である。珍しく昆布をもらつたからとて、御子方の總菜にもされず、直ちに竹筒に入れて、お祭の時の神饌の用にしまはれたといふのである。

以上の四句は、千言萬句よりも明らかに、京地に殘された菅公一家の生活狀態を菅公の筆で表してゐる。何たる悲慘な境遇であらうか。その半面には、夫人が凜乎たる決心を以て百難を排して生計の方法を講じ、缺乏のうちに祭事を大事にし、藥餌の果までも注意してをられる誠に行屆いた齊家の有

懊惱ス

これ事とする
指を屈する
梅花遺芳
山田新一郎著、前編菅原道眞の詩歌をあげてその遺芳を偲び、後編菅公夫人の德をたゝへる、大正八年（一九一九）五月刊行。

様が、あり〳〵と見えるではないか。

妻子飢寒ノ苦シミヲ言ハズ。コレ還ツテ余ヲ懊惱セシムルヲ愁フルガ爲ナリ。

留守宅の現狀は前の如くであるが、それを唯その通りの事實として報じただけで、その餘は、徒に夫を心配させまいとてか、自分や子供の飢寒にせめられて困つてゐる愚痴は一言も言うては來ぬ。言はないどころか、お留守はとにかくどうにかやつてゐますと、却つて安心を求めて來る雄々しさは、なかなか並々の婦人で出來る事ではない。榮華これ事とした當時の婦人社會では、指を屈すべき第一人であつたであらう。實に菅公の夫人たるに恥ぢない方と言へようと思ふ。

（梅花遺芳）

芥川龍之介
東京市の人、小説家、昭和二年（一九二七）歿、年三十六。

横須賀
神奈川縣横須賀市、作者は當時横須賀海軍機關學校の教官であつた。

とう（とく）

倦怠

一〇 蜜柑

芥川龍之介

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈がついた客車の中には、珍しく私の外に一人も乘客はゐなかつた。外を覗くと、薄暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さへ跡を絶つて、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しさうに吠立ててゐた。これ等は、その時の私の心持と、不思議なくらゐ似つかはしい景色だつた。私の頭の中には言ひやうのない疲勞と倦怠とが、まるで雪曇の空のやうなどんよりとした影を落してゐた。私は外套のポケットへじつと兩手を突つこんだまゝ、そこにはひつてゐる夕刊を

ずさり（すさる）

銀杏返し

出して見ようといふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私は、かすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを、待つともなく待構へてゐた。ところが、それよりも先にけたゝましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か言罵る聲と共に、私の乘つてゐる二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはひつて來た。と、同時に一つづしりと搖れて、徐に汽車は動き出した。

小娘は、油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある輝だらけの兩頰を氣持の惡い程赤くほてらせた、如何にも田舍者らしい娘だつた。しかも、垢じみた萌黄色

漫然と

の毛絲の襟卷がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包があつた。その又包を抱へた霜燒けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顏だちを好まなかつた。それから、その服裝が不潔なのもやはり不快だつた。最後に、その二等と三等との區別さへも辨へない愚な心が腹立たしかつた。だから、卷煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと言ふ心持もあつて、今度はポケットの夕刊を漫然とひろげて見た。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやうな心持がして、思はずあたりを見廻すと、何時の間にか例の小娘が、向かふ側から席を私の隣へ移して、頻りに窓を開け

洟—鼻せはし

氣紛れ

惡戰苦鬪する

ようとしてゐる。が、重い硝子戸は中々思ふやうに開かないらしい。輝だらけの頰は愈赤くなつて、時々洟をすゝりこむ音が、小さな息の切れる聲と一しよに、せはしく耳へはひつて來る。これは勿論、私にも幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。併し、汽車がいま將に隧道の口へさしかからうとしてゐる事は、暮色の中に枯草ばかり明かるい兩側の山腹が間近く迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事であつた。にも拘らず、この小娘は、わざ〳〵しめてある窓の戸を開けようとする。その理由が私には呑込めなかつた。いや、それが私には單にこの小娘の氣紛れだとしか考へられなかつた。だから、私は、腹の底に依然として險しい感情を蓄へながら、あの霜燒けの手が硝子戸を開けようとして惡戰苦鬪す

はためかす

濛々と

もう

る樣子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈る樣な冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなく、凄じい音をはためかせて汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、たうとうばたりと開いた。さうして、その四角な穴の中から、煤を溶かした樣などす黑い空氣が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ漲り出した。元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顏に當てる暇さへなく、この煙を滿面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつけない程咳込まなければならなかつた。が、小娘は、私に頓著する氣色も見えず、窓から外へ首を延ばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戰がせながら、じつと汽車の進む方向を見やつてゐる。其の姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る〳〵明かるくな

頭ごなしに

一旒
懶げに
蕭索とした
目白押

つて、そこから、土の匂や枯草の匂や水の匂が、冷やかに流れこんで來なかつたなら、漸く咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたに相違なかつたのである。

しかし、汽車は、その時分には、もうやす〳〵と隧道を辷りぬけて、枯草の山と山との間に挾まれた或貧しい町外れの踏切に通りかゝつてゐた。踏切の近くには、いづれも見すぼらしい藁屋根や瓦屋根がごみ〳〵と狹苦しく建てこんで、踏切番が振るのであらう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を搖つてゐた。やつと隧道を出たと思ふ——その時、その蕭索とした踏切の柵の向かふに、私は、頰の赤い三人の男の子が、目白押に竝んで立つてゐるのを見た。彼等は皆この曇天に押しす

陰慘な
風物

喊聲

わざ〳〵

くめられたかと思ふ程、揃つて背が低かつた。さうして又、この町外れの陰慘な風物と同じ樣な色の着物を著てゐた。それが、汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に手を揚げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分からない喊聲を一所懸命に迸らせた。するとその瞬間である、窓から半身を乘出してゐた例の娘が、あの霜燒けの手をつとのばして、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖な日の色に染まつてゐる蜜柑が、凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供達の上へばら〳〵と空から降つて行つた。私は思はず息を呑んだ。さうして、刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、そのふところに藏してゐた幾顆かの蜜柑を窓から投げて、わざ〳〵踏切まで

報い（報いる）

えたいの知れない　昂然と

芥川龍之介全集　芥川龍之介著、十卷、全著作を收む、第二卷は小說集、昭和九年（一九三四）十月――昭和十年（一九三五）八月刊行。

見送りに來た弟達の勞に報いたのである。

暮色を帶びた町外れの踏切と、小鳥の樣に聲を揚げた三人の子供たちと、さうして、其の上に亂れ落ちる鮮な蜜柑の色と――すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、せつない程はつきりと、この光景が燒きつけられた。さうして、そこから或えたいの知れない朗な心持が湧上つてくるのを意識した。私は、昂然と頭を擧げて、まるで別人を見るやうに小娘を注視した。小娘は、何時かもう私の前の席に歸つて、相變らず輝だらけの頰を萌黃色の毛絲の襟卷に埋めながら、大きな風呂敷包を抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐた。

（芥川龍之介全集第二卷）

佐々醒雪　名は政一、京都市の人、國文學者、文學博士、東京高等師範學校教授、大正六年（一九一七）歿、年四十六。

竹取物語　作者未詳、かぐや姫を主人公とする平安朝初期の物語、物語の最初のもの。

伊勢物語　著者未詳、在原業平の事蹟を骨子とした歌物語。

一一 言葉の變遷

佐々醒雪

不思議なものは言葉の變遷である。日本語は幸にして二千年近い記錄を有してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。しかも、萬世一系の帝室を戴いた同一民族の間にのみ發達したので、今から約一千年前に出來たといはれる「竹取物語」や「伊勢物語」を見ても、半分以上は、今日も平生使用してゐる言語で出來てゐる。こんな國は、いふまでもなく、世界中にまたとはないのである。一千年前即ち十世紀前といへば、今の歐洲諸國などは、皆まつたくの野蠻國であつた。

日本語は、こんなに久しい時代を經てゐるから、同じ語でも、その意味は甚だしく變化したものが多い。例へば「いへ」とい

いへあるじ。

平安朝
桓武天皇が平安京に奠都し給うた時から源頼朝が鎌倉に幕府を創立するまで約四百年間。（一四五四―一八五二）

薄倖者
雲泥の違ひ

ふ語などはその一例であらう。昔は「いへ」といふと、家族とか家庭とかいふことで、隨つて「いへあるじ」といへば、一家族中の主長、卽ち戸主のことであつた。然るに、今日「いへ」といふと、家屋、卽ち建築物のことで、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。

更に甚だしい變化は、形容に用ひる詞などに多い。例へば、平安朝の人が「あはれなる人」といふと、大抵は美人のことである。我々が貧民や薄倖者を「あはれなる人」といふのとは雲泥の違ではないか。

かういふ變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語がしきりに用ひられはじめてからも、同樣の變化は認められる。例へば「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふこと

中古
武家時代
鎌倉時代から德川時代の末に至るまで政權が武家に歸して居た時代。

爲朝
源爲義の第八子、武將、鎭西八郎といふ、嘉應二年（一八〇）歿、年三十二。

爲義
源義朝等の父、武將、保元元年（一八二）歿、年六十一。

無法者
鎌倉時代
武家政治の始から北條氏滅亡まで約百五十年間。

であるから、紙屑買が「御不用物はございませんか。」と呼んで來る。然るに中古では「不用なるもの」といふと、用ひるに堪へぬとんまかあはうのことで、更に降つて武家時代に入ると「爲朝が不用であつたから、父爲義が九州に追つた。」などと記してあつて、不用といふのは、いたづら者、または無法者の義である。鎌倉時代に「不用なものはございませんか。」と、呼び歩いたなら、「いたづら者はゐないかね。」と呼歩く鼠取藥の行商人と間違へられたであらう。

これ等はまだ單なる變遷で、中には、その變遷の間に、語源の意義に對して奇怪な矛盾を生じたものもある。漢方醫が廢れて、藥を煎じることがなくなつても、藥鑵といふ名は殘つてゐたり、その他不思議な言葉を列擧すれば際限もないが、就中、

抹茶

希代なのは「茶碗」や「さかな」である。

日本でまだ立派な陶磁器の出來ぬ頃、支那から渡つて來た上等の陶磁器は、專ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつたのである。然るに、日本で硬い上等のものが澤山出來るやうになると、御飯を食べるにも、番茶を飲むにも、陶磁器を用ひはじめた。そこで、飯食茶碗とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出來た。今日ではコーヒー茶碗とさへいつてゐる。御飯を食べるのやコーヒーを飲むのは、御飯碗・コーヒー碗とでもいひさうなものだが、さう理窟通りにゆかないのが言葉である。

「さかな」とは、本來酒を飲むときに食べるものといふ語である。「さか」は「酒樽」「酒盃」の「さか」である。「な」は何でも副食物に

上戸

するもののことで、古は、野菜類は勿論皆「な」であるし、昆布や若布などのやうな食べられる海藻は、皆「磯菜」といつた。それから、魚類は「な」の中の上等のものであるから、上等の建築用材を「ま木」といひ、屋根を葺く上等の草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」「まな箸」などいふ語は、これから來てゐる。然るに、酒といふものは上戸即ち上等の家でなくては飲用しないし、且酒を飲むときは、今も昔も贅澤な副食物を求めることが普通であるので、自然、魚類は、酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつた。既に魚類が「さかな」といふことにきまつてしまふと、下戸が食べてもやはりこれを「酒な」といふのは、飯を食べてもやはり茶碗といふのと同じ不思議である。

統領

たづさはる

棟梁

印半纏

江戸歌舞伎　江戸時代江戸で行はれた劇。

人爲的

言葉はまた使つてゐる中にだん〳〵下落するものである。例へば「大工」といふ語は、工（たくみ）卽ち工藝家中の俊秀なものの尊稱で、多くの小工どもの統領を呼ぶ名であつた。然るに、今日では建築事業にたづさはるものは、小屋掛のたゝき大工でもやはり大工である。かの棟梁・親方なども同樣で、今日は一人の手下もなく子分もない男でも、印半纏さへ著てをれば、卽ち親方であり、棟梁である。

最後に一つ、故意に轉訛せしめた例を示さう。言語の變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎などには、故意につくつた人爲的の言葉がある。一時、兵隊言葉といつて、丸木橋を獨木橋といつたり、一軒家を獨立家屋といつたりしたこともあつたが、今ではそれも廢止せられたやうだ。

齋宮

至當

醒雪遺稿　大町桂月編、佐々政一の遺文を集む、大正七年（一九一七）十二月刊行。

その他には、迷信から來た變造語もいろ〳〵ある。例へば、海邊に生えてゐる蘆といふ草を「惡し」と聞えるのを忌んで、わざと「よし」と呼びかへたり、四を「死」と通ずるとて「よ」といつたり、梨を「ありの實」、硯箱を「あたり箱」、鰯を「あたりめ」といふ類が行はれてゐる。古も、伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮の御所では、髮のない僧侶をわざと「髮長」といつた例もある。

要するに、言語の不思議な現象は、同一の語が、例へば髮長といつて髮のないことを表すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、その變化は蓋し窮極を知るべからずといふのが至當であらう。

（醒雪遺稿）

高濱虛子
名は清、松山市の人、俳人、小說家、明治七年（一八七四）生。

連歌
俳諧

縷々として

一三　俳句に就いて

高濱虛子

俳句は十七字の詩であるといふことは解りきつたことのやうであるが、私は、こゝに改めて「俳句は十七字の詩である。」といふ事を、第一にはつきり言つて置く。

和歌は千數百年の歷史をもつ短い詩である。この和歌から連歌が起り、連歌から俳諧となり、俳諧から俳句が生まれて來た。この變遷は少くとも百年・二百年の年月を經て成つたものであるが、畢竟、俳句は和歌の上の句が獨立して出來たものである。隨つて、和歌では五七五七七の調であるが、俳句は五七五の調である。

この和歌の五七五七七といふ調子は、或感じを縷々として

あまの原
古今集にある安倍仲麻呂の歌。安倍仲麻呂―中務大輔船守の子、靈龜二年（一七六）遣唐留學生、在唐五十餘年、寶龜元年（一四〇）歿、年七十。

故山
綿々として

古池や
芭蕉の句。

芭蕉
本名松尾宗房、伊賀國（三重縣）の人、元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

ぼく〳〵した

述べるに適してゐる。たとへば、

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

といふ歌の如きは、たゞ月に對し、海原遠く離れた故山を偲ぶものであるが、かく三十一字になつて見ると、如何にも遣るせない情緒が綿々として出てゐるやうな感じがする。これは五七五七七の調子が、自然に縷々としてその感じを述べるに適してゐるからである。ところが、俳句になると、

古池や蛙飛びこむ水の音

といふやうに、和歌では下の句として缺くことの出來ない七七の文字が省かれて、單に五七五といふ調子であるから、大いに面目を改めて、ぼく〳〵した調子になつて來る。上に述べ

渾然として

たやうに、俳句も和歌の上の句だけを取つたものであるから、やはり和歌のやうな調子のものでありさうに思へるが、實際は大變違つて、全く別種のものとなつてゐる。この五七五といふ調子は、どんな調子のものであるかといふと、五七五の三つが一寸離れ〳〵になつてゐるやうな感じがある。和歌の方は、七七といふ文字がその後にあるがために、全體の調子が伸びやかになつて、渾然として一つに溶合つてゐるのであるが、その七七の文字が無くなつて、單に五七五だけになると、その五と七と五とが各獨立して、別々のものとなつて行かうとする傾向がある。これが和歌と俳句との大變な相違となるのである。

即ち、この古池の句にしても、先づ「古池や」といふ五字で、讀者

換言する

奈良七重
芭蕉の句。

テニヲハ

に古池の景色を想像させ、次に「蛙飛びこむ水の音」といふ十二字で、蛙の飛込む水音がするぞと、第二段の想像をさせるといふ順序になつて來る。換言すれば、古池の句の場合は、初の五字だけが獨立してゐて、あとの七と五とは連なつてゐるのである。

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふやうな句になると、五と七と五と皆離れ〳〵になつてゐる。この句意は後に述べよう。

和歌は「テニヲハ」の文學といつてもよい程に「テニヲハ」をやかましくいふが、これもやはり、綿々として盡きぬ情を歌ふに適した文學だからである。然るに、俳句では「テニヲハ」は勿論、説明的な言葉は出來るだけ省略し、「や」とか「かな」とかいふ特別

の助辭を使用する。隨つて「テニヲハ」には重きを置かない。この俳句の調子から來る特色が、情を述べるのにはどうも不適當なのである。この情を述べるに幾分でも不適當な文學である俳句の使命は、然らば何であるかと言へば、それは景色を描くといふ點にある。恰も繪畫のやうに、景色を言葉で、文字で、描くのである。

元來、文學は言葉で出來てゐるもので、言葉は時間的のものであるから、感じを順々に歌つて行くとか、又は、事件を順々に述べて行くとかいふのには適してゐる。長い小說のやうなものでも、短い和歌のやうなものでも、或事件の推移を寫すとか、或感じを述べるとかいふ性質のものである。それが畫であると、目に見る或瞬間の景色を畫面に描き現すものであつて、時間的でなくて、全く空間的のものである。然るに、俳句は意外にも、——私は「意外にも」といふ——繪畫に近いものとして存在してゐる。

併しながら、景色を描くといつても、文學であるから繪畫とは全然同一にはならないが、大體に於て、文學本來の性質たる時間的變化を描くに適しないで、空間的描寫に適してゐると言へようと思ふ。これは五七五といふ調子と、切詰めた短い詩形とから起つた當然な結果で、これがやがて一方に大なる特色を形造つてゐるのである。尤も、かういへばとて、俳句も文學である以上、勿論、感じとか事件とかを述べてはならぬと言ふのではなく、又、古來さうした俳句は全く無いなどといふのでもない。

空間的描寫

季題

奴

又、俳句には「季題」といつて、春夏秋冬の季を述べなければならぬ事になつてゐるが、これは景色を描く上には當然の要求である。何故なれば、四季を超越した景色といふものは、全然この世界には存在しないからである。

次に、實際の句に就いて説明を二三試みよう。これは極端な例であるが、

女郎花腰黑茶碗髯奴

といふのがある。これはどんな意味かといふと、女郎花が咲いてゐる、その側で髯の生えた奴が腰黑茶碗で飯を食つてゐるといふのである。これは前にも述べた樣に、五七五の調子から自然に離れ〳〵になつてゐるのである。即ち、女郎花・腰黑茶碗・髯奴と別々に離して述べてあるので、唯我々が心の中

で、その離れ〳〵になつてゐる物に連絡をつけて、女郎花が咲いてゐる側で、髯奴が腰黑茶碗で飯を食つてゐる樣子を思ひ浮かべるのである。これは繪畫にすれば女郎花と腰黑茶碗と髯奴との三つの別々な物が、一畫面に描き現されてゐる譯になる。同じ樣な極端な例であるが、前に擧げた芭蕉の句、

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふのは、奈良は古の都であつて、「奈良七重」は、人家が澤山立ち並んで賑かであつたといふことをいひ、「七堂伽藍」は、立派なお寺の大きなのがあり、そして、「八重櫻」は、奈良は八重櫻の名所であるから、櫻の盛りの奈良といふ事を現した句である。この句は、どうかといふと、一寸とりとめのつかないやうな句らしく考へられるが、我々は勝手に想像して、一幅の古の奈良の

名月や
炭太祇（すみたいぎ）の句、太祇は不夜庵と號する、江戸の人、俳人、明和八年（一七七一）歿、年六十三。

畫を描き出すのである。これらの句は共に極端な例であるが、次は、

名月や舟なき磯の岩づたひ

といふ句に就いて考へて見よう。こゝに「名月や」といふのは、空に名月がかゞやき渡つてゐるといふので、「舟なき磯」は、舟が一艘も見えない磯といふのであり、「岩づたひ」は、その磯の岩の上を傳うて人が歩いて行くといふのである。これにも言葉が大變に省略されてゐる。私は前に和歌は「テニヲハ」の文學であると言つたが、俳句では「テニヲハ」のみならず、その他の色色な言葉も省略される。髯奴の句も、たゞ名詞をつゞけたばかりであり、奈良の句も名詞ばかりである。岩づたひの句はどうかといふと、何も別にいつてはゐないが、美しい名月に誘はれて、岩づたひに人が歩いて行く、普通ならば、舟が一艘もなくて寂しい青白い磯邊を、よい心持で歩いて行く、といふことが想像される。して見ると、この句に於ても「テニヲハ」のみならず、如何にも多くの言葉が略され、簡略になつてゐるのが解る。このやうに、景色を描くといふ點に於ては繪畫と同じやうであるが、俳句の方には、岩づたひに歩いて行くといふやうな時間的なことも吟じ得るが、畫の方にはそれが全く出來ない。

蕪村

谷口信章、與謝姓も名乗つた、攝津國（大阪府）の人、俳人、畫家、天明三年（一七八三）歿、年六十八。

蕪村の句に、

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり

といふのがある。京都の賀茂川などには、よく菜を洗つてゐる女を見受けるが、場所は何處とも限らない。舟で女が菜を

洗つてゐる。菜を洗つてゐる女に特別に何の關係があるといふのでもなしに、水鳥が浮いてゐる、といふ景色で、全く繪畫と同じ描き方である。舟に菜を洗ふ女と水鳥とで、近景と遠景とを描いてゐるのである。

かういふ風に、俳句は、和歌の上の句から獨立した十七字から成つたものであるが、十七字の詩として獨立する必要上、和歌の範圍を脱して、別に景色を描くといふ一つの大きな特色を成したのである。しかも、これは偶然に成つたのではなく、五七五といふ調子から來た當然の結果である。

（講演筆記）

笹川臨風　名は種郎、東京市の人、歴史家、文學博士、明治三年（一八七〇）生。

武田鶯塘　名は四郎、東京市の人、俳人、明治七年（一八七四）生。

巖谷小波　名は季雄、東京市の人、俳人、お伽話作家、昭和九年（一九三四）歿、年六十四。

高田蝶衣　名は千郷、兵庫縣の人、俳人、明治十九年（一八八六）生。

永田青嵐　一頁參照。

原石鼎　名は鼎、島根縣の人、俳人、明治十九年（一八八六）生。

一三　現代俳句抄

初霞雞犬の聲遠近に　笹川臨風

夕空のうつろひて羽子頻りなり　武田鶯塘

大和路や雲雀落込む塔の陰　巖谷小波

綿ぼこりつけて虻去ぬ窓うらゝ　高田蝶衣

田植川草を浸して流れけり　永田青嵐

山の色釣上げし鮎に動くかな　原石鼎

臼田亞浪　名は卯一郎、長野縣の人、俳人、明治十二年（一五三九）生。

山口誓子　名は新比古、京都市の人、會社員、俳人、明治三十四年（一五六一）生。

伊藤松宇　名は半次郎、長野縣の人、俳人、安政六年（一五一九）生。

水原秋櫻子　名は豐、東京市の人、醫學博士、俳人、明治二十五年（一五五三）生。

飯田蛇笏　名は武治、山梨縣の人、俳人、明治十八年（一五四五）生。

長谷川零餘子　名は譜三、群馬縣の人、俳人、昭和三年（一五八八）歿、年四十三。

大谷繞石　名は正信、松江市の人、俳人、昭和八年（一五九三）歿、年五十九。

ひとへもの徑の麥に刺されけり　臼田亞浪

匙なめて童たのしも夏氷　山口誓子

草市の一夜露けき都かな　伊藤松宇

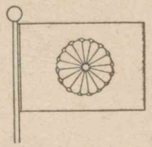
鮠釣る子障子洗ふは姉ならめ　水原秋櫻子

山柿や五六顆重き枝のさき　飯田蛇笏

冬山のいたゞきにすこし日當れる　長谷川零餘子

宵火事の消えて霙となりにけり　大谷繞石

天皇旗



矢田挿雲　名は義勝、横濱市の人、小說家、俳人、明治十五年（一五四三）生。

長谷川かな女　東京市の人、故零餘子の夫人、俳人、明治二十年（一五四七）生。

杉田久女　鹿兒島市の人、俳人、明治二十三年（一五五〇）生。

久保より江　松山市の人、醫學博士久保猪之吉の夫人、俳人、明治十七年（一五四四）生。

本田あふひ　東京市の人、男爵本田親濟の夫人、俳人、明治八年（一五三五）生。

御出門に雪大晴や天皇旗　矢田挿雲

傘さゝぬまだ人通り春の雨　長谷川かな女

あたゝかや水輪ひまなき廂うら　杉田久女

土手につく花見疲れのかた手かな　久保より江

のうれんに淡雪ふりて消えにけり　本田あふひ

河井醉茗
名は又平、堺市の人、詩人、明治七年（一八七四）生。

詩 Poem
一 詩 自由詩 定型詩
二 和歌 短歌 長歌
三 俳句
四 漢詩
五 民謡

一四 冬青樹

河井醉茗

葉もあたりまへ、
枝振もあたりまへ、
知らない間に
小さい白い花が咲いたやうだが、
いつのまにか小さい青い實になつて、
青い實が黑くなると
小鳥が氣づいて食べに來る。

醉茗詩集
河井醉茗著、既刊詩集に新作を加へたもの、大正十二年（一九二三）一月刊行

よけいに茂りもしないが
よけいに落葉もしない。
冬が來ても
どの葉もこの葉も
同じやうに呼吸をして、
同じやうにあをあをと
靜かに
目にたたない冬青樹よ。

（醉茗詩集）

戸川秋骨
名は明三、英文學者、慶應義塾大學豫科教授、明治三年（一八七〇）生。

まち肥料
自給
寒肥

一五　冬の日記

戸川秋骨

一月――日

冬の畠は全く無事である。只、秋に種を播いた豌豆と蠶豆との芽が霜にも負けず、雪に蔽はれては却つて生長して行くばかりである。春の用意は冬、寒中に於てすべきだ。僅かばかりの畠地ではあるが、今何も作つてない、あいた所にまち肥料を置く。肥料は自給である。

樹木にもそれが必要だといふ。所謂寒肥を施さなくてはならない。鍬を取つて一本の樹のまはりを掘ると、寒さのために地は凍つて居て、掘れはするが、土の一塊々々は殆ど石のやうに固い。小さい庭の樹木の半分ほどに肥料を施したら

もうくたびれてしまつた。短い冬の日ももう暮れて來たので今日はこれでやめる。

一月――日

夕食が終つて、一家がまだ食膳のまはりを去らない時に、よく私は昔の話や、自分の話をするのが癖になつた。子供達が食物に就いてかれこれ文句を言ふのを、多少誡める心持もあつて、自分の幼時なども言出す。おかあさん――お前方のあの死んだお祖母さんが、よくこのおとうさんに言つて聞かせた事だが、おとうさんの子供の時分は非常に貧乏で――おとうさんの又おとうさんはうちを留守にして何處かへ行つて居たのだ――日々の食事さへろくに出來なかつた。或時などはもうお米を買ふ事も出來ず、御飯がたべられないのでお

とうさんとおとうさんの弟とが、おなかがすいた、すいた、とやかましく言ふので、ほんとに困つてしまつた事さへある。私はそんな話までした事もあるが、子供達にはそんな事もお伽話のやうにしか思はれないらしい。いや、成長する力に充ちた子供達が、親のやうな氣分になつたら、それこそ困つた事だ。こんな悲慘な事はお伽話として聞いてくれる方がよい。そんな話を聞かされた子供の一人は言出した。おとうさんの話はいつでも昔の貧乏であつた事だが、お祖母さん――母方の、現在達者で居る老人――の話は、いつでも昔の自分の榮華だ、と言つて笑つた。なるほど、さう言はれて見ると、このおばあさんは昔の繁昌ばかりを口にする。さうだ、貧乏にせよ、榮華にせよ、昔の事を口にするのは、つまり愚痴だ、これはやめた

エマスン
ラルフ・ウオルドゥ・エマスン、アメリカの思想家（西暦一八〇三―一八八二）。

ブルウタス
マルクス・ユニウス・ブルウトウス、古代ローマの政治家（西暦前八六―四二）。

フイリピの戰
フイリピはマケドニヤ（ギリシヤ）の一都市、ブルウタス及びカツシウスの軍が、オクタヴイヤス及びアントニウスの爲に敗れたところ。（西暦前四二）

ユウリピデイス
古代ギリシヤの悲劇詩人、思想家（西暦前四八四―四〇六）。

方が良いかも知れない。子供の訓誡などにはあまりなり得まいから。併し、愚痴ではあるがまた兩方とも一種の自慢でもある。若しさうとすれば、貧乏であつた自慢の方が、今日としては話し榮えのある自慢だぜ、と言つて私も笑つた。

一月――日

久し振りでエマスンの勇壯論を讀んだ。

「ブルウタスに就いて斯ういふ話がある。ブルウタスがフイリピの戰後、自刃しようとした時、ユウリピデイスの句を引いて『あゝ德操よ、吾は終生汝に從へり。而も、今にして結局汝の、影に過ぎざるを見る。』と言つたさうである。私は勇士ブルウタスがこの話に依つて侮辱されたものである事を疑はない。勇壯なる心の人は、その心の正義とその貴さとを賣りも

飽食暖衣

呪咀

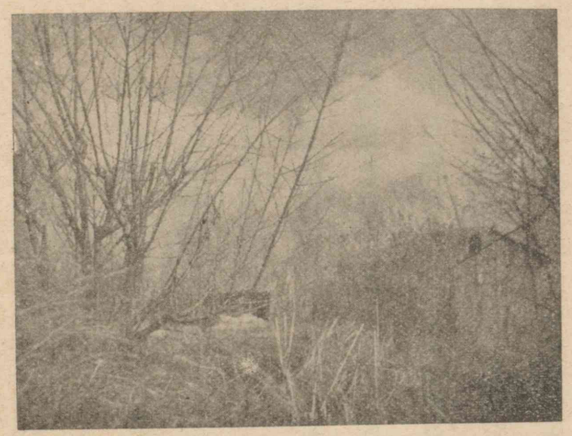
のにする事はない。勇壯の人は、美味を喰ひ暖く眠る事を願ふものではない。偉大なる事の要素は、德そのものを以て足る事を覺えるにある。貧困はその裝飾である。それは飽食暖衣を要せず、損失にも甚だよく安んじ得るのである。」とエマスンは言つて居る。德を守つたが爲に、却つて身の不幸を招いたのは當然である。さうあるべき筈である。それをブルウタスとも言はれる人が、最後の自分の沒落を見て、それまで守つて居た德が影に過ぎないなどと呪咀の言を吐いたのを、エマスンは怪しんで、それは作り話であると斷言して居るのである。德を罵るのも悲壯で、ブルウタスに對する一片の同情でもあらうが、エマスンのやうに考へるのが眞實であらう。世の中は善人亡び惡人榮える、と考へるのもあまりであらう

正鵠を得る

が、榮枯盛衰と德とは何のかゝはりもないとするのが、正鵠を得た考へ方ではあるまいか。

二月——日

冬の美は霜にある。靜かな晴切つた朝でなければ霜を見る事は出來ないが、さういふ朝はどんなに寒くても、身體が引締つて心持がよい。霜の美は老境の美である。自然は死んだやうに見えるが、それが霜に蔽はれて居る光景は、その霜に恐るべき生物を枯死させる力のあるに拘らず、却つてそれに



冬の麥

髣髴する
小味な

依つて生かされて居るやうに見える。地上は一面にその白い薄物を以て敷きつめられて居る。枯草も一本々々その薄物によつて包まれて居る。殊に枯殘つて居る雜草の細かい細かい而も密集して居る纖維が、丹念に細かく、一筋々々、一部一部それに依つて包まれて居るのは、自然の中に比べるもののないほどの美觀である。細かいレース、佳人の著た薄物は僅かにそれに比べられるものであらうけれども、人工は如何なる纖細な技を以てしても、この姿を髣髴させることは出來ない。一年を通じて自然界に見る珍しい光景は、春に見る若い草花の穎割（かひわれ）と、この枯草の霜を被つた姿とである。私は冬の自然は、その光景は、大きなものと思つて居た。その極致は崇高にあると考へて居た。今にしてこの微細な處にも、小味

豐潤
蕭條
凋落する

自然・氣まぐれ・紀行

戸川秋骨著、隨筆集、昭和六年（一九三一）五月刊行。

な美しさのあるのをうれしく思つた。この霜を踏んで木立のほとりを歩いて居ると、忽ち傍らのかれた叢の間から名も知らない小禽がさつと飛立つ。あとにはその小枝から蹴散らされた霜が粉のやうに落ちて來る。

さう、自然のあらはれ方はいろ〳〵である。春の華麗、夏の豐潤、秋の蕭條、それ等に比べると、冬は矢張り、むしろ崇高の趣を主とするのであらう。木の葉がみな凋落して居るから、どこまでもが見透しになる。光景は廣く大きくなる。廣野や高山の姿は冬になるとまた特殊の趣がある。

（自然・氣まぐれ・紀行）

貝原益軒
名は篤信、筑前國（福岡縣）の人、儒者、正德四年（一三七四）歿、年八十五。

ことわり
たがふ（ちがふ）

一六 過と惡

貝原益軒

衆人の行、萬事につきて過と惡とあり。過とは、心に惡なけれども知らずして理（ことわり）にたがひ、或は心附かずして理にたがふをいふ。惡とは、善惡は知りながら、慾に引かれて理にたがふをいふ。これ自ら欺くなり。身を修むるには、過惡を改め善に遷るを務とすべし。聖人は過なし。賢者以下は過なき事なし。殊に凡人は過多し。何ぞ今の世に過なき人あらんや。人の諫を聞きても用ひず、我に過あれども知らずして、過なしと思ふ人あり。これ自ら修むるに志なきゆゑなり。若し自ら修むる人は、過多き事を知るべし。自ら省みて我が過を知り、人の諫を聞きて我が過を改め、善に遷るべし。

尙書
書經ともいふ、支那最古の經典。

過ツテハ則チ
論語學而篇。

偏—褊—遍

常に我が身を省みて、先づ我が過を知るべし。既に過を知りなば、速に改むべし。尙書に「過ヲ改ムルニ吝（ヤブサカ）ナラズ。」と言へり。吝とは惜しむなり。過を惜しまずして早く改むるをいふ。孔子も「過ツテハ則チ改ムルニ憚ルコト勿レ。」とのたまへり。我が身の過を知らざるは愚なり。過を知りて改めざるは卽ち惡なり。知らずして過つより尙その罪重し。

貝原益軒

過は必ず氣質の偏より起る。剛なる人は心强き所より過起り、柔なる人は心弱き所より過起る。氣質の偏なる所に克ちて、過なからん事を求むべし。學者常に我が氣質の偏を察し、その過

うべなり

離婁　昔支那で、一本の毛を百歩はなれて視たといふ視力のすぐれた人。

子路　姓は仲、名は由、子路はその字、孔子の弟子。

を省みて改むべし。かくの如くせざれば、學問の益なし。これ學者の專ら務め行ふべき所なり。過を改むるは、氣質の偏に克つ道なり。氣質の偏なる所には克ち難し。常に力めて十分の力を用ふべし。

我が身聖人にあらず、過多きはうべなりとて、過を知りながら改めざる人は、むげに道に志なき人なり。自暴自棄と言ふべし。斯樣の志なき人にならひて、我が過を宥すべからず。

人の目は、百里の遠きを見れども、その背を見ず。明鏡と雖もその裏を照らさず。離婁が明目なるも、そのまつげを見る事なし。こゝを以て、人知ありと雖も、我が身のあやまりを知り難し。故に君子の學は、專ら我が身を省み、人の諫を聞用ひ、過を知りて改むるを旨とす。子路は我が過を人の告ぐるを

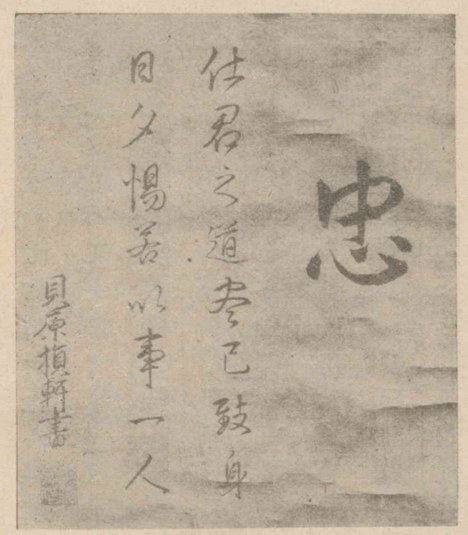
百世の師

程子　程顥、宋時代の學者（西暦一〇三二—一〇八五）。

忠　君ニ仕フルノ道ハ、己ヲ盡クシ身ヲ致シ、日夕惕若トシテ以テ一人ニ事フルナリ。　貝原損軒書

益軒は初め損軒と號した。

喜べり。故に「百世の師なり。」と程子もいへり。人を知る事誠に難しといへど、我が身の惡しきを知るは、また人を知るよりもなほ難し。こゝをもて、我が過を告知らする人あらば、誠に喜ぶべし。人僅かなる財を贈り、或は酒肴を贈るも、受くる人これを喜ぶ。況や、いひ難き諫をいひ、自ら知難き過を聞くをや。我が身に於てかゝる大なる益なし。諫を聞く事、豈幸ならずや。子路の喜べる事、うべなるかな。過を聞く事を嫌ひ、諫をふせ



貝原益軒筆蹟

ぐは、惡しきの至なり。諫を聞きて過を改むるは、醫を招きて病をいやすが如し。過あれども諫をふせぎて、人の正す事を嫌ふは、病を育てて醫を嫌ふが如し。その身を失へども顧みず。悲しむべし。

古の賢者は、我が過を聞く事を好み、人の諫を喜べり。諫を聞きて過を改め善に遷らば、道に進む事極まりなし。善なる事これより大なるはなし。又、古の賢者は、人に譽めらるゝを喜ばず、我が善を聞く事を好まず。我が善を聞きては益なきのみならず、若し少しにても我が身に誇る心出できて、善をなすに怠らば、大なる害あり。今の人は、我が過を聞く事を好まず、人の我を譽むるを悅び、我が善を聞く事を好む。世にへつらへる小人多き故、譽むる者多し。それを誠ぞと心得て身に

へつらふ
小人

ほこり、善を行ふに怠るは愚なり。末の世の人は、唐も大和もすべて人の諫を好まず。故に、人を諫むるをひとへに世なれぬかたくななる人と思へり。父として子を諫むれば、我が父は老耄せりといひ、また、老人は今の風を知らずとて毀り怨む。臣として君を諫むれば、おごれり、無禮なりとて怒り遠ざく。こゝをもて人毎に世の俗になれ、人の欲にしたがひ、へつらひて諫めず。この風若し世に行はれ風俗となりなば、善は日々にすたり、惡は日々にさかんになりて、道行はるべからず。悲しむべし。およそ、諫を言ふ人有難し。古來唐も大和も諫を喜ぶ人は最も有難し。故に諫むる人も稀なり。

（大和俗訓）

かたくななる
老耄す

すたる
有難し

大和俗訓
八卷、貝原益軒十訓中の一、教訓書、寶永五年（一三六八）作。

新井白石　名は君美、德川幕府儒官、享保十年（一三六五）卒、年六十九。

伊達政宗　仙臺藩の祖、寛永十三年（一三九六）歿、年七十二。

上杉景勝　當時會津領主、慶長五年（一三六〇）石田三成に應じ兵を擧げた、後に米澤に移された、元和九年（一三八三）卒、年六十九。

搦手　白河　福島縣西白河郡白河町。

白石　宮城縣刈田郡白石町。

磐城　福島縣磐城郡平町。

相馬　福島縣相馬郡中村町、相馬義胤の領。

累代

一七　伊達政宗

新井白石

上杉景勝が兵起りし時、伊達左京大夫政宗は、急ぎ本國に歸りて搦手より攻入るべき由の仰承りて、大阪を打立ち、夜を日に繼いで馳せ下る。白河より白石に至るまでは、皆敵の中なれば道塞がりぬ。常陸國を廻りて、磐城・相馬にさしかゝりて國に歸らんとするに、相馬亦累代の敵國なり。恙なく通らんこと叶ふべからず。然るに、政宗僅かに五十騎ばかり引具して、常陸の國を經て、磐城と相馬との境に至りて、先づ相馬が許に使者を立て、「此の度德川殿、上杉を征伐し給ふに因りて、政宗搦手より向かふべき由を承りぬ。路次既に塞がりて候ひし程に、東路に隨ひて漸く此の境に至り侍りぬ。餘りに道を早

恙なし

打つ

點ず

長門守義胤　平盛胤の子、寛永十一年（一三九四）歿、年八十八。

しつらふ

末座の意見

僉議

窮鳥懷に入る時は　「窮鳥懷ニ入レバ仁人ノ憫ムノ所ナリ、況ヤ死士ノ我ニ歸スルヲヤ」（類氏家訓）といふに基づいて日本で作つた諺。

めて打ちし程に、士卒悉く勞れぬ。願はくは城下に旅館點じて給はらん。馬の足を休めて、明日は國に入らんと存ず。」と云はせたり。長門守義胤これを聞きて、「あつぱれ、運の盡きぬる奴原かな。たゞにも伊達は相馬が年頃の敵なり。ましてや身方討たれんー方の大將承ると云ふ者を、いで〳〵今宵一夜討して、案内知らぬ者共を此處彼處に追詰めて、一人も殘さず討取つて、年來の仇に報い、今度の賞に預らばや。」とて、やがて民家をしつらうて迎へ入れ、家子・郎從等召集めて、夜討の樣をぞ議したりける。

爰に水谷（みづのや）三郎兵衞尉某、遙の末座より進み出で、「末座の意見、恐れ入つて候へども、既に僉議の座に列なりて候上は、心に存ずる所を申さざらんは其の詮なし。抑『窮鳥懷に入る時は、獵

たばかる
弓矢の瑕瑾
駒が峯
福島縣相馬郡駒ヶ嶺村。
未の時
糧料
夜をめぐる

者もこれを殺さず。』とこそ承れ。政宗ほどの大名が、既に年來の恨を棄て、君を賴みて來りしを、たばかつて闇々と討たれんは、勇者の本意とする所にあらず。長き弓矢の瑕瑾なり。又、我が城を去つて、彼の國の境、駒が峯に到らんこと、行程僅かに三里。けふの日、未だ未の時に下らず。政宗おのが境に到らんとだに思はゞ、日ゆふべならざる間に到りぬべし。それに僅かの勢を以て此處に止ること、豈深き謀計なからざらん。唯同じくは、我が備を全うして、彼に代つて夜を守り、先づ此の度は本國に返し給ひ、重ねて戰に臨まん時、尋常に軍して勝負を兩家の天運に任せらるべうもや候はん。」と申しければ、滿座の輩、皆此の議に同じて、彼が旅館の邊に、糧料・魚鹽・秣・糠・藁に至るまで積置きて、夜に入り四面に篝火たかせ、兵共に夜をめぐらせ、警衛心を盡くしてけり。

たべ（たまへ）
巳の刻

義胤が士ども、政宗が餘りに取鎭めたる體を見て、「憎し、いざ彼が振舞を試みん。」とて、夜更けて、馬一二匹切つて放つ。雜人ばら走り散つて、以ての外に騷ぎ罵る。政宗は小童一人に燭持たせ、白き小袖上に打掛けて、左の手に刀提げて立出で、「相馬殿の御人や候、御人や候。」と云ひし時、「さむらふ。」とて參りければ、「物音高う候、何事にや。政宗が雜人ばら、狼藉候はんには、能く鎭めてたべ。」とて、又内にぞ入りにける。斯くて夜明けければも、立ちもやらず。巳の刻ばかりになりて、義胤が許に使して一禮し、靜かに馬を打つて行く。竊に人を付けて見せたるに彼の國境の駒が峯のあなたに、伊達が軍勢雲霞の如く滿ち滿ちて出で迎へぬ。

關ケ原の合戰
慶長五年(一五九〇)石田三成が豐臣秀吉死後の政變を憂へ德川家康と雌雄を決した合戰、相馬は石田方に加つた。

世帶一定

本領安堵
藩翰譜
十三卷、新井白石が甲府侯綱豐(後の將軍家宣)の命をうけ、元祿十四年(一七〇一)著した諸侯の傳記・沿革・勳功を誌した書、翌十五年上進。

斯くて關ケ原の合戰事終り、天下悉く平ぎて、相馬既に世帶を沒收せられ、家亡ぶべきに極まる。政宗德川殿に訴へ申しけるは、「相馬はたゞにも政宗が年頃の敵なり。それに上杉・石田等に與したるが一定に候はんには、政宗彼が爲に討たるべき時至つて候ひしに、君の仰承り馳せ下る由を聞きて、忽ちに舊き恨を忘れ、新しき恩を施して候ひき。是偏に彼が野心を挾まざりし故にあらずや。且は又累代弓矢の家、此の時に至つて長く斷絶すべきこと、誠に不便の至なり。唯然るべくは、彼が本領安堵の事、御免を蒙らばや。」と、折に觸れて度々歎き奉りしかば、其の事となく、年月を經て後本領をぞ賜うたりける。

(藩翰譜)

荻原井泉水
名は藤吉、東京市の人、俳人、隨筆家、明治十七年(一八八四)生。

第一著手

一八 ボタンの穴

荻原井泉水

こんな事がよくある。シャツの着心地が何となく窮屈なと思ひつゝ一日を過して、著かへる時に見ると、ボタンの穴を一つ掛けちがへてゐたのだ。最初の一つをふつと掛けちがへたことが、其の次も、其の次も、ずら〳〵と皆掛けちがへる事になつたのだ。これがシャツであるからこそ、一日少しく窮屈をした位で濟む。それと同じやうな事を、私達はもつと重大な生活の上の事でして居りはしないか。其の事の第一著手において、一桁まちがへた爲に、最後までまちがへる事になる。かうした人は、ボタンを掛けちがへた人のやうな、眞面目

所見

な滑稽をし通してゐたといふことを、一生を終へる際になつて、初めて氣附くのである。

是は途上の所見である。父親が子供を歩かせてゐる。よちよちと歩く、其の樣が今日は少し歩き下手だとは思ひつゝ、手を引いて行く。ちと疲れたやうだ、いつもより疲が早いと思ひつゝ、好く氣附いて見ると、靴の右と左とを取りちがへて穿かしてゐたのだつた。靴の右と左と、好く見ればまちがへる筈もないものを、うつかりとまちがへてゐたのだ。子供こそかはいさうである。だが、それと同じやうな事を私達は日常の身邊に於てしば〳〵經驗する。何か腹立たしく思ふやうな事のあつた時には、又は、これはこんな筈ではないがと思ふやうな時には、自分が其の事の右と左とをまちがへて居り

東海道膝栗毛

十返舍一九著、江戸八丁堀の彌次郎兵衛・北八が東海道を上り、伊勢參拜をすませて京に入るまでの滑稽道中記、享和二年（一八〇二）—文化六年（一八〇九）刊行。

はしないかといふことを省るがよろしいのである。

いつぞやこんな事があつた。興のまゝに岸にあるボートに乘つた。二三人がいきなり、櫂を取つて漕ぎ出した。ボートは動くけれども、進みが惡い。櫂をとるものはばか力を出す。駄目だ、駄目だ、何の事だ。あべこべだ。舳と艫とを取違へて漕いでゐたのだつた。是と同じやうな事も、私達は平生の仕事において時々する。それは大抵、獨り苦笑しただけで濟む事が多いが、それが笑ひ事にとゞまらない、重大なことになることもあるのだ。何事にでも前と後といふものがある、其の點を先づ見究めてから取りかゝるべきものである。

東海道膝栗毛にかういふ話がある。ある宿で、彌次郎兵衛は五右衛門風呂に浮いてゐる蓋を取つてはいつた。あ、熱い。

焼處

足がぢかに釜を踏んだのだ。風呂の蓋と思つたのは、實は風呂の底だつたのである。風呂の底をはがして入つたのだからたまらない。だが、是は一彌次郎兵衛の失敗として笑ひ去るべき事ではない。蓋に最もよく似てゐる形をしたものは底だ。しかも蓋と最も相反する用をなすものは底だ。すべて、第一著手としてなすべき事には注意が肝腎。物事の蓋と底とを誤れば大燒處くらゐはしかねないのである。

二

これは新聞で讀んだ話である。東京地下鐵道株式會社の社員採用試驗に百六十餘名が集つた。試驗問題は「次の字を行書にて書け——東京地下鐵道株式會社。」受驗者の悉くが忽ちに答案を出して場を出た事は勿論、誰もが皆、合格した積

いきなりと常識

メンタルテスト
英語、「精神考査」と譯す、簡易な方法で、心理作用や智能の發達程度を檢査し、個人的差異を測定すること。

りでゐた。ところが合格者はたつた一人しか無かつた。誰もが行書に書く事は成し得てゐたが、悉く紙の裏に書いてゐたのだ。試驗用紙はわざと半紙を裏返して配られてあつた。問題を呑んでかゝつた爲に、いきなりと、ついうつかりとしてゐたのである。會社の庶務課長は語る「つまり常識以外の何物でもない。苟も毛筆で物を書く場合に紙の裏表を考へぬやうでは役に立ちません。然し、大學の卒業生の中で紙の裏表を知つてゐた者が一人しかなかつたとは、嘘のやうなほんとの話です。」と。

此の話は面白いメンタルテストである。だが、私は此の話をも少し深く考へたい。私達が物事に當る場合に、第一に肝要な事は、其の物に右と左との別、或は前と後との別、或は上と

勘違ひ

骨折損の草臥儲け

進捗する

下との別がある、それを誤らぬ事だ。　さうして、それに從つてそのやうに、それに向かはねばならない事だ。　紙で言へば、裏と表とである。　すべての物事に、このやうな裏と表とがある。たとへば、或事を觀察する時に、その裏と表とを誤つてゐるならば、如何に研究したとても、其の理解は得られない。　又、或人に對する場合に、其の人の裏と表とを勘違ひしてゐるならば、如何に近づいても遂に其の人の腦裡に觸れる事は出來まい。其の人を愛しようとする事が却つて其の人を損ふ場合の如き是である。　又、或事を成さうとする時に、其の事の裏と表とを取違へて取りかゝつたならば、結局は骨折損の草臥儲けに終るであらう。　自分のしてゐる仕事がどうしてはかばかしく進捗しないのであらう、どうしてすら〳〵と成功しないの

非力

非時

ワイズマン

アウグスト・ワイズマン、ドイツの動物學者、進化論に自說を樹てた。（西暦一八三四—一九一四）

ピラミッド

エジプト、ナイル河畔に聳立する、約七十五基の三角塔、西暦前三千年頃のエジプト國王・王族等の墓として造築したもの。

身邊の書

昭和四年四月から昭和十一年一月まで雜誌「層雲」の卷頭言として載せた感想文を集めたもの、昭和十一年（一五九六）九月刊行。

であらうと、自分の非力を歎じたり、環境の非時を怨んだりする場合に、靜かに心をかへして、ひよつと、自分は其の事の裏と表とを取違へて著手してゐたのではなかつたかと、點檢して見る必要はたしかにあると思ふ。　ある科學者がワイズマンの業績を評した言葉に、彼の頭腦は實に綿密であり、精緻であり、又すばらしく努力家である事には敬服するが、惜しいかな、彼はピラミッドを逆しまに建てようとするものだ、と言つてゐる。　私はこの評言の當否に就いては知らない。　けれども、世間にはピラミッドを建てようとして其の構想に苦心するけれども、どちらが上か下かといふ事にはうつかりしてゐる人がまゝある。　紙の裏表にうつかりしてゐる人達は一層多い事である。

（身邊の書）

幸田露伴
名は成行、東京市の人、文學者、文學博士、文化勲章拜受者、慶應三年（一八六七）生。
間切る
底る
あだに
巧者なる

一九 潮待つ間

幸田露伴

風に逆らひて舟を行るには、間切るといふ工夫もあり、流に逆らひて舟を進むるには、押切るといふ意地もあれど、唯春の日の潮の底りて遠淺の海のことく干潟となりたる時のみは、意地にも工夫にも舟を操らん道なく、あだに心のあせらるゝものなり。

嘗て此の事を言出でて、

「然る折にも何とか爲すべき手段ありや。」

と、老いて物事に巧者なる舟人に問ひけるに、舟人、打笑ひて、

「何時にても纜を解かんとならば、何時にても水ある處に舟を繫ぐべし。我等は、繫ぐ時に解くことを思ひて繫ぎ、解く

こゝを以て

時に繫ぐことを思ひて解く。素人は、繫ぐ時は解くことを思はず、解く時は繫ぐことを思はず。こゝを以て、歸らんとして歸る能はず、進まんとして進む能はず、徒に心を干潟にあせるやうの事もあるに至るなり。若し既に干潟に居坐りたる舟となりたらんには、我等なりとて、其の場に臨みて何の手段のあるべき。たゞ少しは早くとも、心長閑に食事など濟ませて、さて、やがて立働かん折、足もつれのせぬやうに、舟の中を取りかたづけ、猶それにても時餘らば、舟道具を丁寧に檢め繕ひなどして、時と潮とを待つべし。潮を待つは愚かしけれども、待たぬよりは賢きわざなり。何時か一度は爲さでかなはぬことを爲しつゝ、待たば必ず來るべき潮を待つに、大抵其の事は爲し果つるにも至らで、潮ははや

たちまちにして來るものなり。何時か一度爲さでかなはぬことは、小さき舟の中につきてもいと多きものなれば、潮待つ間に爲すべきことのなきといふはなし。潮待つ間に爲すべきことあるを見出して之を爲せば、たゞ時の足らざるを覺ゆるのみにて、更に心のあせらるゝことなどあるべくもなし。」

と言ひけり。

おもしろき言葉なりと思ひしかば今に忘れず。

（露伴全集）

露伴全集
十二卷、幸田露伴の全作を集める、昭和四年（一九二九）十一月――昭和五年十一月刊行。

前田夕暮
名は洋三、神奈川縣の人、歌人、明治十六年（一八八三）生。

陰―蔭・影
ほゝける
蕗の薹

二〇 春

前田夕暮

鈍く光つた藁垣の陰に、長く伸びた蕗の薹がほゝけて、白い矮鶏が二三羽餌をあさつてゐる。

春の彼岸の日の色は、ぼつと薄赤みを帶びて、庭の隅の甘藷苗場は、まるで蒸風呂のやうに蒸發してゐる。

土間に立つて、明かるい外を見てゐると、日光が雨のやうにふつてゐる。その日光の中に立つてゐる木・竹・雞・猫・犬、それ等は皆影をもたぬものはない。黑く軟い土にひいた物の影の親しさだ。

うつすらと青んだ畦と、一杯春の水を張つた水田とを向かふに見せた明かるい村の往還を、黑い風呂敷包を背負つた老

婆が一人ぽつつりと杖をついて通つて行く。と、また、あとから一人、やはり同じやうに黒い包を背に瘤のやうに丸くくゝりつけて、白髪を光らして行く。

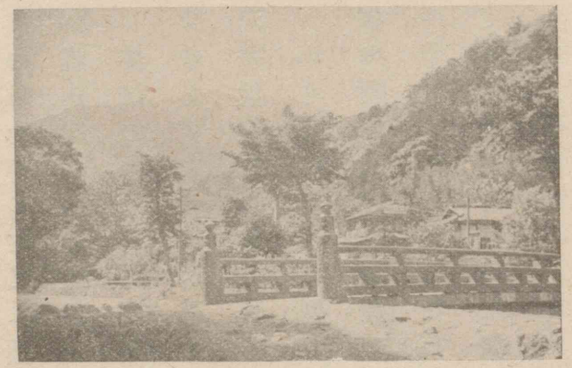
二人だけだと思つたら、そのあとから源助爺さんを先にして十人ほどの村の老人たちが、いづれも黒い包を背負つて、杖をついて、影繪のやうに次から次に續いて行く。さうして、その人たちは、低い聲ではあるが、樂しげに御詠歌を歌ひながら行く。極樂淨土禮讃の念佛を申しに山に行く人たちである。

それから一時間ほど經つて、上の山の畑の畦で、私はひとりで凧を揚げてゐた。

凧はよくあがつた。凧絲を手に握つて、高い畦に腰をかけてゐる心持はよいものだ。全く無心の境地である。

阿夫利山
大山、雨降山ともいふ、神奈川縣の中部に聳える、海拔一二五三米。

私の凧の二本の尾は、ゆらり〳〵と空中で光つて波を打つてゐる。その尾の裂けてゐる下には、阿夫利の黒いとがり嶺がそそり立つてゐる。私の眼は凧を離れて、その山の襞を流れる。思ひきり谷が深くくひ入つてゐるほとりで、更に前山の圓い線がふつくらと浮かんでゐる。その山の上には、ほんの掌ほどの廣さの赤い毛氈が敷かれてある。その赤い毛氈の上には、豆粒ほどの人が黒くかたまつてゐるのが遙に見える。さうして、春の淨



阿夫利山

しなはせて

盤臺

土を禮讃する老人たちの念佛の鉦の音が、その山上から遙に
凧の絲を傳つて私に漂うて來る。
誰か向かふの往還を馬を曳いて行く、
麥畑の中を行く旅人がある。黑い帽子をかぶつてゐる。
ゆた〳〵と天秤をしなはせて行く農夫がある。
子供が一人、農夫のあとを駈けて行く。
小さな赤い旗を廻りに立てた盤臺を頭に載せて、體を振り
振り行く夫婦の飴屋がある。
飴屋は何と思つたか、原つぱの菜の花畑の眞中で、でん〳〵
でんと太鼓を打つて、何か唄を歌ひながら、二人で踊りだす。
二人は調子づいて、ぐる〳〵と緩く體を廻しながら、ふらり
ふらりと腰をうかして踊つてゐる。

テンポ
「調子の速さ」の意、イタリイ語。

落つこちた（落ちた）

胴間聲

赭ら顏

太鼓の音が、その合間に緩いテンポで鳴る。
誰も見てゐる人とてはない原つぱの眞晝である。
私は人形踊のやうな飴屋の踊を、ついうつとりと眺めてゐ
た。さうして、張りきつてゐた絲が緩くたるんで、一二町さき
の桑畑の中に凧の落ちてゐるのを知らぬほどであつた。
「おゝい、誰の凧だよう。俺の頭に落つこちたでないか。」と、胴
間聲で呼ばれて、始めて氣がついた。あわてて立ちあがつて
見ると、平たい大きな赭ら顏が菜の花の上で笑つてゐる。
「坊やの凧か。ほゝら、いいか、絲をたぐるのだよ。」と高く兩手
で上にあげてくれた。
私は絲を片手で高くさし上げて、畦路を一散に駈けだす。
低くたるんでゐた絲が、つと張つて、斜に高くあがつて行つた

のす

朝、青く描く

前田夕暮著、自然を題材とせる散文集、昭和六年（一九三一）六月刊行。

ので、私は始めてほつと安心をして體を轉換させる。

凧は喜ばしげに、うつすらと青んだ草山を這ひあがつて、村の老人たちが山上禮讚の念佛を申してゐるあたりを一なぐりに掠めて、やがて阿夫利山のてつぺんを突拔けて、りゆうりゆうと空にのして行く。

私は安心して、また畦の上に腰をおろす。

一踊踊り終つたと見えて、ふら〳〵とまた體を搖りながら行く夫婦の飴屋の後姿、といつても赤い旗を立てた頭の上の盤臺だけが、菜の花の上を流れて行くやうに見える。

（朝、青く描く）

相馬御風

名は昌治、新潟縣の人、文學者、明治十六年（一八八三）生。

ダリヤ

觀賞用

二一 路傍の草

相馬御風

小學校や、女學校や、中學校などの生徒たちの描いた花の繪を展覽會などで多く見るが、それ等の十中八九が、菊とか、ダリヤとか、朝顏とか、コスモスとか、薔薇とかいつた樣などちらかと言へば、觀賞用といふ型にはまつた花を寫したり描いたりしたものであるのには、何時ももの足りなく感じさせられる。私たちは、何もさうした種類の花を描く事その事に不滿を感ずる者ではないが、しかし、少くとも田舍に生活してゐる子供たちには、さうした型にはまつてゐる花より以外に、もつともつと多く美しい花があるべきはずの樣に思はれ、その點が不滿に感じられてならないのである。

背戸

かうした

特に觀賞の爲に一般的になつてゐる花の美しさは言ふまでもない。しかし、さうした種類の花の外に、わけて田舍では、山にも、野にも、背戸にも、路端にも、數限りなく美しい花が咲くのである。

さうして、それ等の多くの花は、特に注意しないまでも、田舍の子供たちの心を養ひもし、樂しませもしてゐるのである。それであるにも拘らず、彼等の大多數は、いざ美しい花の繪を描かうといふ段になると、それ等の最も親しみの深いはずの花を除外するのである。私たちの不滿は其所にある。

「この節の若い者は、草や木の名すらろくに知らない。」私は、嘗てかうした歎聲を、ある山の村の一人の老人の口から聞いて、なるほどと感じ入つたことがあつた。田舍に住んでゐる

ソロー　ヘンリ・デヴィッド・ソロー、ウォルデンの池畔に隱者の生活を樂しんだ、「森の生活」といふ隨筆を書いてゐる、エマスンと起居を共にした時があつた。（西暦一八一七―一八六二）

私たちに取つて、最も親しみのある草や木の名――それすらも知つてゐる人の少いといふことは、何といふ情ないことであらう。毎日自分たちの往來する路端に、春に、夏に、秋に、咲く花は隨分多くある。さうして、それ等の雜多な草の花は、知らず識らずのあひだに私たちの心に貴い養を惠んでくれてゐる。しかも、私たちの多くは、それ等の名前すらろくに知つてゐない。

かの森林生活で名高いアメリカの哲人ソローは、彼の毎日往來する路端の叢で、その日〳〵にどこで何の花が咲くかを、大概知つてゐたといふことである。さうして、エマスンは、その一事によつても、ソローがいかに自然を愛し、いかに自然の現象に注意深かつたかを十分知る事が出來るといつて、賞讃

芭蕉

なづな

しな

してゐたといふ事である。私たちは、其所までは行き得ないにしても、少くとも毎日自分たちの往來する路傍に咲く花の美しさに心を引かれ、それ等の名前ぐらゐは知つてゐてもよささうなものである。

嘗て私は、芭蕉の、

よく見ればなづな花咲く垣根かな

の句について、こんな事を考へた事があつた。

「よく見れば」――かう芭蕉が言つた時、彼は確に一種の驚を覺えてゐたに相違ない。垣根の下土に何時となしに生えた、あのぺんぺん草の樣な見る影もない雜草でさへ、人知れずつつましやかに生きてゐる。あの小さな草にさへ、春が來ればかうして花が咲く。こまかな何のしなもない白い花が咲く。

――思ひがけなく芭蕉がさうした自然の風物に心を引かれたのも、さうして、そのうちに無限の興趣を覺えたのも尤もである。恐らくその場合芭蕉自身も、その經驗によつて、平常の自分に、よく見ない時間の多かつた事の反省が起らないではゐなかつたであらうし、同時に「よく見る」といふ事の貴さを、彼は恐らく今更の如く驚歎せずにはゐられなかつたであらう。

これは自然に就いてだけではない。人間に就いても同じである。

「あなた方が偉いと思つてゐる人の名を書いて御覽なさい。」かういふ先生の問に對して、十中八九の生徒たちの書く名前は、大概きまつてゐる。無論さうした書物で教へられたり、先生から教へられたりした昔や今の偉い人たちの名を記憶し、

定評

雜草苑
相馬御風著、隨筆集、大正十三年（一九二四）九月刊行。

それを書くのは結構な事である。しかし、さうした定評のある偉い人たちの多くの名の中へ、一つくらゐ自分自ら偉いと實感した、自分の手近な人の名がはひつてもよささうなものではなからうか。

私たちは、願はくは、見る影もない一莖の草に就いても、限りない自然の美と意味とを味はひたいものである。さうして、それと同じ様に、自分のつい手近にゐる只の人に就いても、限りない人間の貴さを感じたいものである。

（雜草苑）

三浦梅園
名は安貞、豐後國（大分縣）の人、儒者、寛政元年（一七八九）歿、年六十七。

毀譽
言募る

二二 帚木

三浦梅園

毀譽は人の大節なり。然りといへども、世擧りて譽むるにも必ず察すべし。人擧りて毀るにも必ず察すべし。況や一人は譽め、一人は毀るに於てをや。たとへば、訟へ事あらんに、兩方理なりと思へばこそ、互に言募りて止まざるなれ。これを奉行のさばかんに、どにかく一人は勝ち、一人は負くべし。勝ちたる人は奉行を譽め、負けたる人は毀るなり。又、惡しき人なりとも、それに伴なふ人は之を善しと思へばこそ交るなれ。我が善しと思ふをば譽め、我が惡しと思ふをば毀る習なれば、その毀譽によりてその人の善惡も分かち難し。まして人傳などに聞かんことは覺束なきことなり。

月代

向後

きこえず
理不盡

昔、人ありて、その子をある寺へ遣はし置きけるに、暫くありて逃歸り、住持の事を毀りけるは「我に『月代剃れ。』と言ひければ、例の如く剃りけるを、剃りやうの別きて惡しとていたく叱りぬ。またある時、我が厠に行きけるを見て『何とて厠へは行きし、不屈なり。向後厠へ行くべからず。』と言ひ、その後、朝飯焚くとて味噌を摺りけるに、之も味噌を摺るがきこえぬとて、理不盡の次第、殆ど困却に及ぶ。」と語りけるを、親聞きて「さりとは、出家にも似合はざることなり。」とて、急ぎ山に登り、右のことどもを詰りけるに、住持聞きて「いや

三浦安貞先生著
梅園叢書 全三冊
浪華書肆 文海堂 宋榮堂合梓
梅園叢書

指南

薗原
長野縣下伊那郡智里村の地名、歌枕。

帚木
傳說上の木である、歌によく歌はれた。

日蓮宗
佛教の一派、日蓮を祖とす。

眞宗
佛教の一派、詳しくは浮土眞宗、門徒宗・一向宗ともいふ、親鸞を祖とす。

いやさやうのことにては無し。常々髪能く剃る故、この頃剃らせけるに、いたく眠りて、これ見給へ、かくの如く、頭へ切込み候。」とて、疵を見せ「その上厠も常の厠へは行かで、客の爲に設けたる方へ行き、味噌も常の味噌をさしおき、客に使ふべきを使ふ。是等の指南をこそ返す返すも致しつれ。」と言ひけるにぞ、親も理に服しけるとぞ。信濃の國薗原といふ處に木あり。遠くより見れば、帚の形の如し。依つて之を帚木と言ふ。されど近づきて見れば、帚に似たる所も無くうち繁れるとかや。遠きより見聞くと、親しく見聞くとは、多くこの帚木の類なるべし。

凡そ、人の物を批判するも、我が好む所を譽むるものなり。俳士に歌人の評判させ、日蓮宗に眞宗の評判させんに、いかで

義經　源氏、義朝の第九子、頼朝の弟、平家追討に功あり、文治五年（一八九）衣川の館にて自殺、年三十一。

俱に天を　父ノ讐ニハ與ニ共ニ天ヲ戴カズ。（禮記）

秀衡　陸奥の豪族藤原秀衡。

亡父　源義朝。

法皇　後白河法皇。

宸襟

梶原景時　頼朝の臣、平家討伐の時、四國に渡るに際し義經と逆櫓のことで爭つた。

詮なし

仕業

か公論あるべき。同じ道を二人して行かんに、一人は健にして、この道近しと言ひ、一人は疲れて遠しと言はん。これ道に違あるにあらず、心に違あればなり。譬へば、義經のことを論じて、義經を善しと思ふ人の言はんには「この人、誠に幼より常人にてはおはしまさざりけり。俱に天を戴かざる讐を報ぜんと、夜々寺を出でて、太刀打を學び、遙に秀衡が人と爲りを見て、是により、つひに飛ぶ鳥も落すばかりなる勢の平家を、二三年の中に攻亡して、亡父の恥辱を雪ぎ、法皇の宸襟を休め奉り、絶えたる源氏を興し、兄頼朝を天下の武將と仰がしめたり。」と言ひ、又義經に不滿の人は「なるほど、この人戰爭に一とほりは自由を得たる人ながら、平氏を亡し、恣に振舞ひ、梶原景時と詮なき口論、大將たらん人の仕業に似ず。然るを都に逃上り、頼

院旨

雪と墨

公の論

梅園叢書　三卷、三浦梅園著、教訓を主とした隨筆集、安政二年（一八五五）刊行。

朝追討の院旨を申し受け、芳野山にて一人の靜に別れかね、兒女子の涙を絞られき。」など言ひ、善しと思ふ人の論と、惡しと思ふ人の論とは、誠に雪と墨となるべし。その惡しき所を捨てて善き所を取る、これ人を用ふるの道なり。その惡しきをば惡しとし、善きをば善しとする、これ公の論なり。又、分相應に就いて言ふことあり。鼠は甚だ大なりと言ふとも、牛の小さきには及ばじ。蛇を甚だ短しと言ふとも、蚯蚓よりは長かるべし。故に、人を善しと言ひて譽むるも、惡しと言ひて毀るも、その場その場を考ふべきなり。

（梅園叢書）

今井邦子
長野縣の人、歌人、明治二十三年（一八九〇）生。

上野
東京市下谷區上野公園、上野動物園がある。

二三　獅子と虎と私

今井邦子

動物園は私の東京に於ける好きな處の一つである。動物園といつても、私は特にそのなかで、獅子と虎とを見にゆく事が好きだと言つてもよいかもしれない。と言つて、私はさう度々動物園見物に出かける譯ではない。大抵春のお花見の時に行くくらゐなものである。上野は私の家から電車の都合がよくて、乘換なしに行く事が出來るのと、他の花見場所程いやな混雜がないので、私の家ではお花見といへば、子供を連れて上野にゆくのが例で、さうして花を見ながら子供八分の人の群に混つて、動物園にはいるのである。

「お母さん、又獅子と虎でせう。」

ひやかす
威嚴
眼中におかない

かう言つて私をひやかす今年女學校の二年生になつた長女が、ちよこ〳〵歩きを始めた頃からの毎年の例なのである。

獅子は全體に威嚴があつてめつたに物に動じない風がある。その顏が第一に、人間などはあまり眼中においてないといふ樣子がある。私はこの樣子が實に氣に入つてゐるのである。

それは幾年前の事であつたか、或時、私は動物の歌を作る爲に一人で大變おそくまで、もう動物園もそろ〳〵しめる頃になるまでも、そこに遊んでゐた事があつた。太陽は夕方の色になつて、西の方へ大へんかたむいてゐた。いろ〳〵の鳥がさわがしく一しきり鳴聲をたてるのも、もの寂しい思ひのする時であつた。最後に、獅子の檻のある丘へ再び上つてゆく

根氣負け

と、獅子は人造岩の一番高い處にのぼつてゐて、あの威嚴のある顏をじつと夕日に向けて、少しも動かない姿勢をとつてゐるのであつた。

「獅子は夕日を見てゐるのかしら……」

私はかう思つて熱心にその方を見續けてゐたけれど、やがて私の方が根氣負けがするほど、獅子は動かず立ちつくしてゐるのである。その間、まだ殘つてゐた幾人かの人々も、それを見て、しばらく見て、見飽いて、この丘を去るのであつた。

「やあ、獅子が岩にのぼつてゐるぞ。」

「石を投げて見ろ、怒るかな。」

かう言つて、ある人々は小石をひろつてばら〳〵と投げて見るのである。石は格子にあたつて上に空しくはねかへつ

神經質な

捨ぜりふ

たり、又は檻のたゝきの上に神經質な音をたてて落ちてしまひ、まれには獅子の體にあたつた。……それでも、獅子は何事も知らぬかのやうに、じつと夕日に向かつて、時々靜かに寂しくまたゝきをしてゐるのであつた。人々はすぐ飽いて、捨ぜりふを言つて丘をくだつた。最後には私も疲れてしまつた。さうして、一つには、時のおくれるのに心が急いで、つひにその儘そこを立去つたのであつた。しかし、その時、岩の上に四足を確と蹈まへて、じつと夕日に向かつてゐる獅子の姿には、獸といふよりも人間の、しかも優越孤

獅子

優越孤獨
自問する
げすな
自答する
今年
動じる

獨の高い境地に、みづから寂しくて輝いてゐる古將軍の姿などに現れる、何とも言へぬ崇高な感を受けるものがあつた事を私は今も忘れない。

「獅子は怖しい動物だらうか。」

私は時にかう自問する。

「やはり怖しい動物であらう……けれど、たしかに、げすな動物ではない。」

私はかう自答する。

今年の花見に行つた時、獅子は四頭になつてゐて、それが四頭とも全く勞れたやうな形をして、べたり〳〵と石の上に眠つては、時に目を寂しくみひらいてゐた。その有樣が、どこか自分等の運命を悟つて、動じない所があるやうであつた。櫻

悟入
猛惡
心構
陰險な

の花がひら〳〵と心なくその背に散りかゝる風情は、實に一幅の繪の如く、又、ある悟入の世界を表示するかの如くであつた。

獅子を見てしまへば、必ず次は虎にゆくのが私のいつもの順路である。同じ猛獸といひながら、その性をかくも異にしてゐるのかと思へる程、虎は、一見直ちに猛惡の相をなしてゐる。その顏にも、その姿にも、悠々とした威嚴といふやうなものは影さへない。あくまで、人に對し、他に對して、心構をなし、窺ひ寄る陰險な心を現してゐる動物

虎

段ちがひ

である。私はこの虎の徹底的な陰險さにもまた興味をもつたのである。

「いやだな、怖しい顏をしてゐる……」

見物人もかう言つて通る。虎は獅子のやうに悟つた風は少しもない。望のない檻のなかを絶えずのそ〳〵と廻り歩き、時にふと立止つて、何物をか聞かんとする風をする、あくびをする、時に低く唸る……私はその動作を見てゐると、思はず苦笑ひしたくなる。

「獅子とは違ふな。段ちがひだ。獅子のやうに悟らうとしても、どうしても悟り切れないものがある。」

私は心でかうつぶやいた。

今年行つた時は、丁度、正午時であつた。日頃檻に飼はれて

屈托な

殺風景な

ゐるいろ〳〵な動物が、屈托な一日々々の連續の中せめて生物らしい心を呼びさまされる食事時であつた。鳥は奇聲をあげ、猿は木から飛降りて一方ならぬ騷を演じてゐた。

虎の檻を見ると、殺風景なブリキの大箱に何かの肉と水のやうなものを入れて、あてがはれてゐる。その箱に、柔かくしなやかな……それ故に一層無氣味な大舌をのばして、ぺろりぺろりと肉をなめつゝ食べてゐた。鋭くふとぶとしいその齒牙の根から、ずつと血に染まつた大きな口をあけて、時々滿足さうに舌なめずりをしつゝ。

食事は終つた。一ばん端の大虎の次に、標札には豹と書いてあつたけれど、なかには牝虎らしいものが居る。……その牝虎は食後の興奮に己をもてあますかの如く、床にくるりと

背をすつてころがり起き、怖しい唸をあげ、人を目がけて格子の扉の方へ進んで來た。その一瞬には、全くそこに鐵格子があり、さらにガラスの窓を隔てて居る事を知りつゝ、一同は後ずさりをした程であつた。牝虎は群衆の中に赤兒を見ると、一層いらだたしく唸を強めたと見る一瞬、ぽんと身を躍らせて天井高き格子の上までとび上り、どんと床の上へ落ちてくるのである。このすさまじい光景は實に幾度となく續いてゐた。虎の居る場所は奇を好む人、又怖いもの見たさの人々で押すな〳〵の大騒であつた。

「母さん出ませうよ、お畫たべませう。」

かう子供たちに促されて外に出たが、私はそのすさまじい光景にまだ心が殘るのであつた。

（酉草）

酉草
今井邦子著、隨筆集、昭和八年（一九三三）一月刊行。

鈴木文史朗
名は文四郎、銚子市の人、朝日新聞社員、明治二十三年（一八五〇）生。

自衛
酋長

二四 新聞の話

鈴木文史朗

人間には、自分の住んで居る處の周圍に起きる事件を早く知りたがり、又それを知つた場合は、すぐ他人にこれを知らせたがる本能があります。人類が太古野蠻な時代に、山間・原野に部落を作つて、鬪爭しながら生活して居た時代でも、隣の部落にどういふことが起りつゝあるかを知ることは、興味の上からばかりでなく、彼等にとり自衛上最も必要であつたに相違ありません。隣の部落の酋長が死んだとか、急に弓矢を澤山作つたとかいふやうなことを知つた者は、それを直ちに自分の仲間に觸廻つて歩いたことは容易に想像されます。

新聞の發生は、かうした人間の本能に基づくものでありま

實質的告示

中葉印刷機の發明

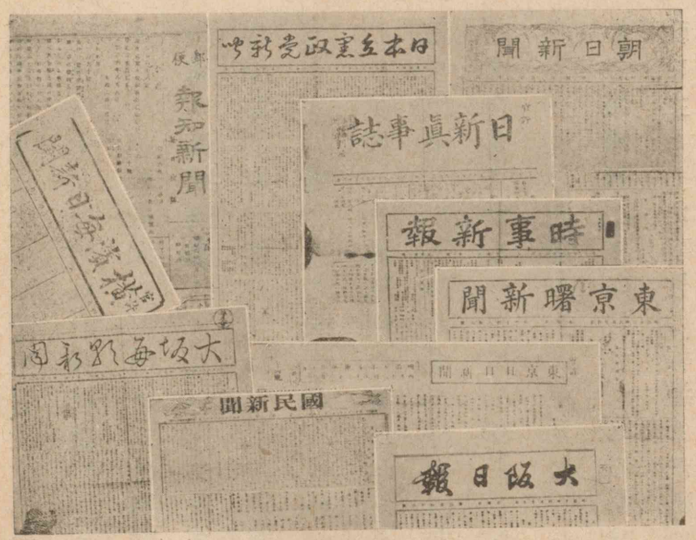
西暦一四三八年頃ドイツ人グウテンベルヒによつて活字印刷は創められた。

週刊

す。人間が文字を使用し始めた時は、實質的には現代の新聞の第一號が、何等かの形で、例へば個人間の手紙とか、政府の告示とかに現れ出した時であり、十五世紀の中葉に印刷機がドイツで發明された時は、現代の新聞の形態を持つた新聞が現出する豫告の時でありました。

現代の新聞は、イタリー、ドイツ、イギリス、フランス等で、十六世紀の中葉頃から漸次發達し出したものであります。その創始時代には、何れも週刊の形で發行され、紙面にはその發行都市を中心として起きた政治上の事件などを主として、聞くがまゝ、見るがまゝ、思ふがまゝ書きつらねるといふ程度のものでありましたが、その後、世界各國の進歩變轉は同時に各國の新聞を異常急速に發達せしめ、遂に今日のやうに「二十世紀は

機構



明治初期の新聞

一面に於て新聞の時代」といはれるまでになつたのであります。

日本でも明治維新と共に、現代新聞の機構は西洋文明の一つとして輸入され、今日では日本の大新聞は世界でも第一流の域に達し、歐米人を驚歎せしめてゐる實況にあります。

新聞は大體以上に述

庶民階級
知識欲
普遍化する
知識階級
報道

べたやうな理由で發生し、發達して來たのでありますが、その發展は十九世紀の中頃以後に於て、殊に目覺しいものがあります。その最大の原因は、この期間に世界何處の文明國でも、教育が庶民階級にまで一般に普及し、人間の知識と知識欲とが全體的に向上し、讀む習慣が普遍化した爲であります。

昔は何處の國でも、讀んだり書いたりすることの出來るものは、少數の知識階級に限られたものでしたが、それが、殆ど誰でも出來るやうになつた結果、何處の國でも國民の大多數が新聞を要求するやうになりました。この結果、注目すべき現象が新聞の發達の上に起りました。といふのは、新聞が少數の知識階級のみに讀まれてゐた時代は、政治や外交などの國政を主とした事件の報道とか、殊にそれに關する意見を中心

ニュース
不文律
故意に
意識的に

としたものであつたのが、讀者の層が一般庶民階級にまで擴つた結果、新聞が取扱ふ事件の範圍は、著しく擴大されるに至りました。

國家・社會の各方面に起きる日常の事件で、それが讀者に直接・間接何等かの利害關係があり、或は興味を惹くものであれば、新聞はさうしたニュースの報道に全力を注ぐやうになりました。即ち、昔は、政治・外交等、國政に關した記事や、それに關する論說等に主力を注いで居たものが、今日では、何を措いても、ニュース第一といふのが、全世界を通じて新聞の不文律のやうになつて居ります。

この新聞紙の使命の變遷は、新聞の製作者が故意に或は意識的にやつたからではなく、前に述べたやうな理由で、時代が

警句

定義

變ると共に變つて來たものであります。だから、現代の新聞記者は、意見を述べたり、批評したりする前に、先づ第一にニュースを捉へてこれを最も敏速に報道することが、最初の任務となつて居ます。「昔の新聞記者は筆で書いたが、今の新聞記者は脚で書かねばならぬ。」といふのも、現代新聞のニュース第一主義を言現した警句であります。

さて、それなら、新聞の生命とされるニュースとは何ぞや、といふことが問題となります。これに關し、無數の書物が書かれ、議論が出てゐて、一定した定義はありませんが、大摑みにいへば、

一、實際に起きた事件で、日常平凡なことでなく、その發生が、時間的には新しく、地理的には近いこと。さらして、發表

風教

具體的に

が時機に適して居ること。

二、出來るだけ多くの讀者に利害關係があり、興味を與へ、且風教上に惡影響なきこと。

これを具體的にいへば、根據のない想像は、それが如何に珍奇なものでも價値はありません。又、毎日の新しい事實、例へば太陽が東から昇り西に沒するといふことは、人類にとり恐らく日毎の最も重要な事實でありますが、それは日常平凡なことであるから、ニュースにはなりません。猫が鼠を嚙殺したといふことも報道の價値はありませんが、その反對のことが起きたら、すばらしいニュースであります。

又、如何に現實に起きたこと、珍しいことでも、それが餘り古いことであつたり、遠隔の地の出來事であつたり、風教上に惡

丹波　國名、京都府の一部と兵庫縣の一部。

政變

國際會議

いことは價値がありません。四國の人には、北海道の千戸の火事よりも、自分の近くの十軒の火事の方が大きなニュースです。昨年、南アフリカの山中で五本脚の猿が發見されたといふことよりも、昨日、丹波の山中で三本脚のを捕へたといふ方が、日本の新聞の讀者には二倍の興味があります。さうして、この興味の有る無し、或はその程度の大小を判斷するには、そのニュースがどれだけ多くの讀者により熱心に讀まれるかを、判定することによつて決るのであります。今朝、或は昨日起きたといふ政變・總選擧・國際會議の決定・殺人事件・大地震・水害等の記事などが、新聞により常に大きく扱はれるのは、この爲であります。

大體からいふ標準の下に、新聞のニュースは蒐められ、編輯

可能な

大量生産

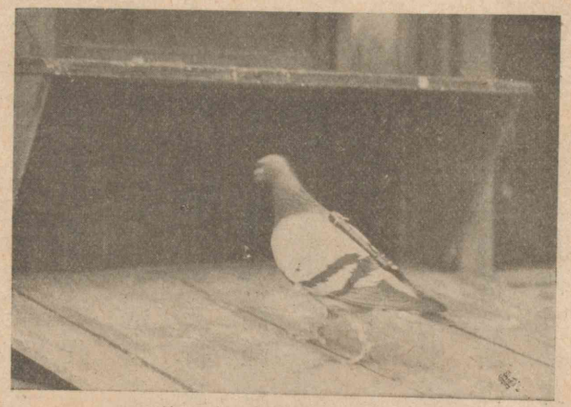
されるのでありますが、新聞の誇とするのは、速報といふところにありますので、それが爲には大新聞社に於ては、その國に於て可能なあらゆる設備が用意され、又常に改善されつゝあります。分業と大量生産とは現代産業の一大特徴でありますが、大新聞社の組織はその代表的なものであります。ニュースを蒐める爲には、編輯局があり、そこでは政治部・經濟部・社會部・外報部(外國或は外交關係のニュースを扱ふ)・地方通信部(地方のニュースを扱ふ)・寫眞部等をはじめ、それ〴〵幾つか

編輯室

紙型

現像

の部門があつて、各專門的に材料を蒐め、蒐つたニュースを編輯局(整理部ともいふ)でこれを取捨選擇し、見出しを附けて印刷部へ廻し、そこでは直ちにこれを活字に組み、紙型にとり、現代高速度印刷の最高峯ともいふべき輪轉機により、一時間十萬枚以上の速度で印刷されます。そこから新聞が印刷されて出て來る光景は、文字通り急流の奔出するが如きものであります。



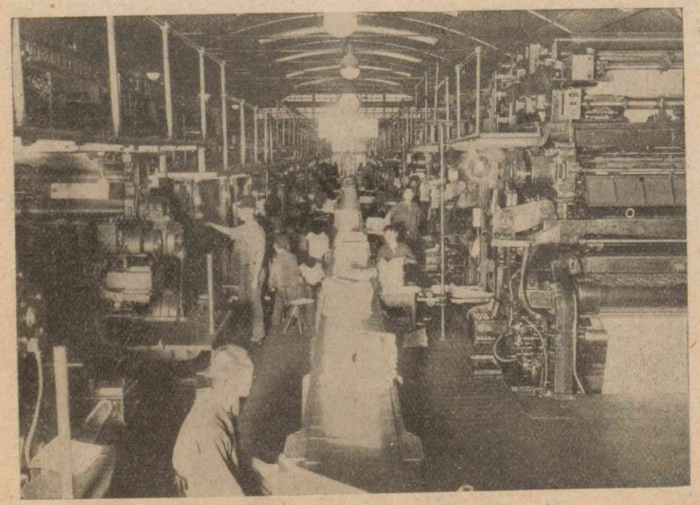
傳書鳩

ニュースを原稿用紙に書き、寫眞を現像室に持運んでから、そ

科學

通信網

れが新聞に印刷されるまでは、急ぐ場合は二三十分しか要しません。かうして敏活を期する爲には、ニュースをとり、これを急送する爲に、大新聞社では飛行機・傳書鳩・寫眞電送機等、最新科學のあらゆる設備が活用され、又、國内と國外とを問はず、重要な都市に社員を常置して、蜘蛛の巣を張る如く所謂通信網を



輪轉機

細大となく

接受する

張つて、ニュースは細大となくそれに引つかゝるやうに工夫されてあります。そこで得られたニュースは、電話や電信で刻々に本社に送られるので、本社には常に夜でも宿直員が居て絶えずこれを接受し、重大なニュースは、何時でも號外として發行されます。事實晝夜の別なく一年中活動して居るといつてもいゝのは、新聞社であります。

この外、新聞社には營業の方面があることを忘れてはなりません。即ち編輯局に對して、營業局があり、これは大體販賣部と廣告部とに分かれて居ります。販賣部は新聞を賣廣め、讀者の手に配達して、その代金を集めるのを仕事とします。廣告部は新聞へ載せる廣告を集めるのが任務で、新聞がその用紙代と大した相違のない安い値段で賣れるのは、この廣告

公機

幇助

女子國文新讀本
千田憲編、高等女學校用國語教科書
昭和八年（一九三三）十二月刊行。

による收入利益があるからであります。日本の大新聞では、販賣と廣告とによる收入利益は各半ばして居ます。

健全な新聞は常に獨立した言論報道の公機でありますが、その獨立性を保つ爲には、何者の幇助にも與らないことが必要で、それには營業として能率を擧げることが必要なのであります。よき新聞はよく賣れ、よく賣れる新聞は多くの廣告を集め、この收益によつて益〻よき人材を集め、設備を改善して行けるので、この意味で、新聞社にとり、編輯と營業は車の兩輪のやうな關係にあるといへます。

（女子國文新讀本）

杉田玄白
名は翼、醫師、蘭學者、文化十四年（一八一七）歿、年八十五。

その日
明和八年（一七七一）三月四日。

刑場
千住（東京市足立區千住町）骨ケ原（小塚原）、江戸の刑場の一つ。

とてものことに
良澤
前野氏、醫師、蘭學者、享和三年（一八〇三）歿、年八十一。

淳庵
中川氏。

二五 蘭學事始

杉田玄白

さて、その日の解剖事終り、とてものことに骨骸の形をも見るべしと、刑場にありし骨共を拾ひとりて、數々を見しに、舊說とは相違にして、たゞ和蘭圖に差へる所なきに、皆驚嘆せるのみなり。

歸路は良澤・淳庵と翁と、三人同行なり。途中にて語り合ひしは「さて〳〵、今日の實驗、一々驚き入る。且、これまで心附かざりしは恥づべき事なり。苟も醫の業を以て互に主君々々に仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形體の眞形をも知らず、今まで一日々々とこの業を勤め來りしは面目もなき次第なり。何とぞ、この實驗に基づき、大凡にも身體の眞

申譯
同情
ターフル"アナトミア
和蘭語の人體解剖書、「解體新書」の原書。
通詞
宿願
憤然と
一精

理を辨へて醫をなさば、この業を以て天地間に身を立つるの申譯もあるべし。」と、共々に嘆息せり。良澤も「げに、尤も千萬、同情の事なり。」と感じぬ。その時、翁申しは、「何とぞこの『ターフル"アナトミア』の一部新に飜譯せば、身體内外の事分明を得、今日療治の上の大益あるべし。いかにもして通詞等の手をからず、よみ分けたきものなり。」と語りしに、良澤曰く、「予は年來蘭書よみ出したき宿願あれど、これに志を同じうする良友なし。常々これを慨き思ふのみにて日を送れり。各がたいよ〳〵これを欲し給はゞ、我、前の年長崎へもゆき、蘭語も少々は記憶し居れり。それを種として共々よみ掛るべしや。」といひけるを聞き、「それは先づ喜ばしきことなり。同志に力を戮せ給はらば、憤然として志を立て、一精出し見申さん。」と答へたり。良

なのめならず
善はいそげ

良澤が宅
江戸鐵砲洲、奥平家の藩邸、今の東京市京橋區新榮町七丁目あたり。

舵

茫洋と

澤これを聞き、悅喜なのめならず。「然らば善はいそげといへる俗說もあり、直ちに明日私宅へ會し給へかし。如何やうにも工夫あるべし」と、深く契約して、その日は各宿所へ別れ歸りたり。

其の翌日、良澤が宅に集り、前日のことを語り合ひ、先づかの「ターフル"アナトミア」の書にうち向かひしに、誠に艫・舵なき船の大海に乘出ししが如く、茫洋として寄るべきなく、唯あきれにあきれて居たるまでなり。されども、良澤は豫てより此の事を心に掛け、長崎迄も行き、蘭語竝びに章句・語脈の間の事も少しは聞覺え聞習ひし人といひ、齡も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐこととなしぬ。翁は、いまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちしこ

內象

かた〳〵
解體新書
蘭醫キュルムスの解剖圖譜を飜譯したもので、西洋解剖書飜譯の最初のもの、前野良澤・杉田玄白・中川淳庵等の譯。

助語

となれば、漸くに文字を覺え、かの諸言をも習ひしことなり。

扨、此の書を讀み、いかやうにして筆を立つべきかと談じ合ひしに、「とても始より內象の事は知れがたかるべし。此の書の最初に仰伏全象の圖あり。これは表部外象の事なり。其の名處は皆知れたることなれば、其の圖と說の符號を合はせ考ふることは、取りつきやすかるべし。圖の始とはいひ、かたがた先づこれより筆を取始むべし」と定めたり。即ち「解體新書」形體名目篇これなり。

杉田玄白木像

其の頃は、助語の類も何れが何やら心に落ちつきて辨へぬ

彷彿と

譯註

ことゆゑ、少しづゝは記憶せし語ありても、前後一向にわからぬ事ばかりなり。譬へば「眉といふものは目の上に生じたる毛なり。」とあるやうなる一句、彷彿として長き日の春の一日には明らめられず。日暮るゝまで考へ詰め、互ににらみ合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得ざることにてありしなり。又或日、鼻の所にて「フルヘッヘンドせしものなり。」とあるに至りしに、此の語わからず。「これは如何なる事にてあるべき。」と考へ合ひしに、いかにもせんやうなし。其の頃、譯辭書といふものなし。やうやく長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小册ありしを見合はせたるに「フルヘッヘンド」の譯註に「木の枝を斷ちたる跡、其の跡フルヘッヘンドをなし、又庭を掃除すれば、其の塵土聚りフルヘッヘンドす。」といふやうに讀み出せり。

連城の璧

惠王ノ珠ハ光能ク乘ヲ照シ、和氏ノ璧ハ價連城ヨリモ重シ。（成語考）

シンネン

「神經」の意、オランダ語。

「これは如何なる意味なるべし。」と、又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へかねたり。時に、翁、「思ふに、木の枝を斷りたる跡癒ゆれば堆くなり、又掃除して塵土集ればこれも堆くなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、『フルヘッヘンド』は『堆し』といふことなるべし。然れば、此の語は『堆し』と譯しては如何。」といひければ、各これを聞きて、「甚だ尤なり、『堆し』と譯さば適當すべし。」と決定せり。其の時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の璧をも得し心地せり。

此の如き事にて、推して譯語を定めたり。其の數も次第次第に增しゆくこととなり、良澤のすでに覺え居し譯語書き留をも增補しけるなり。其の中にも「シンネン」などいへる事出でしに至りては、一向に思慮の及びがたきことも多かりし。

不昧者

「これらは亦ゆく〳〵は解くべき時も出て來ぬべし。先づ符號を附置くべし。」とて、丸のうちに十文字を引きて記し置きたり。其の頃知らざることをば「轡十文字」と名づけたり。毎會いろ〳〵に申し合はせ、考へ案じても、解すべからざる事あれば、其の苦しさの餘り「それも又、轡十文字轡十文字。」と申したりき。然れども、爲すべき事は固より人にあり、成るべきは天にありの喩の如くなるべしと、此の如く思を勞し、精を研り、辛苦せしこと、一箇月に六七回なり。其の定日は怠なく、わけもなくして各相集り、會議して讀合ひしに、實に「不昧者は心」とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば、譯語も漸く增し、讀むに隨ひ、自然と彼の國の事態も了解するやうにて、後々は其の章句の疎き所は、一日に十行も、其の餘も、格別の勞苦なく解し得るやう

參向

同臭

板下

にもなりたり。尤も毎春參向の通詞どもへも聞糺ししこともあり。又其の間には解屍の事もあり、獸畜を解きて見合はせし事も度々なりき。

此の會業怠らずして勤めたりし中、次第に同臭の人も相加り寄りつどふことなりしが、各志す所ありて一樣ならず。翁は一たびかの國の解剖の書を得、直ちに實驗し、東西千古の差あることを知明らめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも發明ある種にもなしたく、一日もはやく此の一部を用立つやうになし見たしと志を起しし事ゆゑ、他に望む所もなく、一日會して解する所は其の夜飜譯して草稿を立て、それに就きては、其の譯述の仕方を種々樣々に考へ直しし事、四年の間に、草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すやうになり、遂に「解體

腑分

首唱す

通稱

嚆矢

蘭學事始

二卷、杉田玄白著、「解體新書」飜譯の苦心及び當時の蘭學興隆の機運を語つたもの、文化十二年（一八一五）成る、明治二年（一八六九）刊行。

新書翻譯の業成就したり。

抑、江戸にて此の學を創業して、腑分といひ古りしことを新に解體と譯名し、且、社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し、日本國中の通稱ともなるに至れり。是今時のごとく隆盛となりし嚆矢なり。今を以て考ふれば、是迄二百年來、かの外科法は傳はりしなれども、直ちにかの醫書を譯するといふ事は絶えてなかりしが、此の時の創業、不可思議にも、凡そ醫道の大經大本たる身體内景の書にて、これが醫書新譯の起始となりしは、不用意を以て得し所にて、實に天意とやいふべき。

（蘭學事始）

大町桂月

名は芳衞、高知市の人、文學者、大正十四年（一九二五）歿、年五十七。

清淨

敷島の本居宣長の歌。

愛誦す

清暉

粹

二六 清淨の國

大町桂月

我が國の特質は少からざれども、特質中の特質ともいふべきは、清淨の國なること是なり。

日本國民は一般に清淨の美を愛す。その心清淨なり、その衣、その食、その家清淨なり、その國一體が清淨なり。清淨の美を解せざるものは、到底日本を解するを得ざるなり。

敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山櫻花

この歌が日本人一般に愛誦せらるゝは、國民精神の清美を歌ひ出でたればなり。一體、朝は一日の中にて最も清々しき時なり。空に些かの曇もなき朝、東天に朝日の輝き出づるは實に清爽なるものなり。その清暉に、櫻花中の粹たる山櫻の

映發す

散りぎは。

枝葉のこと

田子の浦ゆ　山部赤人の歌、萬葉集卷三にある。

田子の浦　靜岡縣富士郡元吉原村の海濱。

扶桑

八朶玲瓏

喧傳す

琴線

月雪の　榎本其角の句。

ぱつと映發せるは、なほさらに淸々しきものなり。朝晴天・日の出・山櫻、これだけの好き道具がそろはば、何人か爽快を覺えざるべき。これ卽ち大和魂の本體なり。大和魂は卽ち淸淨の粹なり。櫻花は散りぎはが潔し。日本男子の死を惜しまざるに似たりなどいふは枝葉のことのみ。

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ富士のたかねに雪は降りける

綠波一面、鏡の如き田子の浦、そのあなたに何處より見ても形の變らざる扶桑一の靈山の、八朶玲瓏、天をさゝげて立てるは、これまた淸淨の極みにあらずや。この歌が名歌として世に喧傳せらるゝも、畢竟この美の琴線に觸れたればなり。

月雪の中や命のすてどころ

白うして十四夜　元祿十五年（一三六二）十二月十四日の夜。

寒月

氷刃

烈士

吉良邸　吉良義央の邸、江戸（東京市）本所松阪町。

俳會

其角　榎本氏、寶井氏ともいふ、近江國（滋賀縣）の人、俳人、寶永四年（一三六七）歿、年四十七。

血性

心解す

大高子葉　大高源吾のこと、四十七士の一人、元祿十六年（一三六三）歿、年三十二。

無量

感慨

眞況

心の結晶

積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月獨り大いに冴えたり。この夜、この雪を踏み、この月光を浴びつゝ、氷刃をきらめかして亡君の仇を報いんと討入るは、決死の四十七烈士。天も淸し、地も淸し、人も淸し。當夜吉良邸の隣屋敷にて催されし俳會に列せし其角その人は、元來血性の快男子にして、淸淨の美を心解せる人なり。而して、義士の一人たる大高子葉は實にその俳友たり。月淸きその雪の夜、無量の感慨は發してこの十七文字となる。實によく復讐の眞況と本體とを捉へ得て、淸淨の美を極めたりと謂ふべし。

歌も俳句も秀逸と稱せらるゝものは、多くはこの淸美を捉へたるものなるが、その他の美術・文藝一つとしてこの心の結晶ならざるはなし。花に對する感じの如きも亦然り。近時

外國趣味の入來るにつれて、妖艶なる草花も輸入せられたれど、梅や、櫻や、蓮や、菊や、水仙や、昔も今も日本國民の一般に愛する花は何れも清淨なり。建築に於ても亦然り。日光の東照宮、淺草の觀音堂を見る時、我々日本人はたゞ華麗を感ずるのみにして、尊さを感ずること薄し。然るに、一たび去つて、伊勢の神宮に詣でんか、千木高知れる建築、清淨の美を極めて、そゞろに西行の歌のしのばるゝを覺えずんばあらず。若し伊勢の神宮に向かつて壯大を求め、華麗を求むるものあらば、これ眞の日本國民たる素質に缺けたるところある者と謂はざるべからず。

滄海の中にありて山青く水清き我が日本は、土地そのものがすでに清淨なり。開闢以來、未だ曾て外國に汚されざる我

外國趣味
妖艶なり
日光東照宮
栃木縣上都賀郡日光町にある、德川家康を祀る、別格官幣社。
淺草の觀音堂
東京市淺草區にある淺草寺。
高知る
西行
俗名佐藤義清、歌僧、建久元年（一八五〇）寂、年七十三。
西行の歌
何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ（西行作と傳へ言ふ）。
素質
滄海

が歴史が、すでに清淨なり。他民族の血液を多く混ぜざる我が民族の血統が、すでに清淨なり。しかのみならず、我が國民は、善を好みて惡を憎み、正に就きて邪を排し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶けて强を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よく勇に風流をさへ解して、もののあはれを知れる清淨なる人民なり。我が日本が古來東海の君子國と呼ばるゝも、亦宜なるかな。

（桂月全集）

しかのみならず
風流
もののあはれ
君子國
宜なり
桂月全集
十二卷、田中貢太郎編、大正十一年（一九二二）五月―大正十二年（一九二三）七月刊行。

女子新國語讀本 新制版 卷四 終

國語假名遣表

わ・は

語の上でわ・はは互に紛れない。語の中と下とで紛れる。左の外ははと書く。

あわ(泡・沫)
　みなわ(水沫)
あわつ(周章)
　あわただし(倉皇)
いひわけ(言分)
　のわけ(野分)
　おひわけ(追分)
うらわ(浦回)
　しまわ(島回)
かわく(乾・渇)
くつわ(轡)
　はにわ(埴輪)
くわゐ(慈姑)
ことわざ(諺)
しわざ(爲業)
ことわる(斷・理)
こわいろ(聲色)
　こわだか(聲高)
　こわね(聲音)
さわぐ(騷)
さわやか(爽)
しわ(皺)
しわし(吝)
すわる(坐)
たわし(束藁子)
たわむ(撓)
　たわわに(撓)
たわやか(嬋妍)
　たわやめ(手弱女)
たわら(俵)
はらわた(腸)
ひわ(鶸)
ゆわう(硫黃)
よわし(弱)
かよわし(弱)
いわし(鰯)

ゐ・い・ひ

語の上ではゐ・いが互に紛れ、語の中と下とではゐ・い・ひが互に紛れる。左の語の外はひと書く。

ゐ(井)
　ゐげた(井桁)
　ゐど(井戸)
　ゐぜき(井堰)
　ゐなか(田舍)
ゐ(居)
　ゐざり(膝行)
かもゐ(鴨居)
しきゐ(閾)
くもゐ(雲居)
くらゐ(位)
しばゐ(芝居)
とりゐ(鳥居)
まどゐ(團欒)
もとゐ(基)
ゐ(猪・亥)
　ゐのしし(猪)
　ゐのこ(豕)
　いぬゐ(乾)
ゐ(胃)
ゐる(率る)
　ひきゐる(率る)
あゐ(藍)
　くれなゐ(紅)
あぢさゐ(紫陽花)
くわゐ(慈姑)
まゐる(參る)
おい(老)
くい(悔)
むくい(報)

え・ゑ・へ

語の上ではえ・ゑが互に紛れ、語の中・下ではえ・ゑ・へが互に紛れる。左の語の外はへと書く

ゑ(繪)
ゑがく(畫がく)
ゑのぐ(繪具)
ゑかき(畫工)
とも**ゑ**(鞆繪・巴)
ゑ(餌)
ゑぼし(烏帽子)
ゑむ(笑)
ゑがほ(笑顏)
ゑくぼ(靨)
ゑつぼ(笑壺)
ゑじ(衞士)
ゑふ(醉ふ)
ゑひどれ(醉客)
こゑ(聲)
つゑ(杖)
つくゑ(机)
ゆゑ(故)
すゑ(据)
すゑぶろ(据風呂)
いしゞゑ(礎)
すゑ(末)

すゑひろ(末廣)
こずゑ(木末・梢)
うゑ(飢・餓)
うゑ(植)
うゑき(植木)
うゑこみ(前栽)
ちゑ(智慧)
え(兄)
えと(兄弟)
きのえ(甲)
ひのえ(丙)
つちのえ(戊)
かのえ(庚)
みづのえ(壬)
え(枝)
えだ(枝)
しづえ(下枝)
え(江)
いりえ(入江)
ふえ(笛)
ささえ(蟷螂)
はえ(映)

ゆふばえ(夕映)
もえ(萌)
もえぎ(萌黃)
みえ(外見)
はえ(生)
ひこばえ(蘖)
いえ(癒)
あまえ(甘)
おびえ(脅)
おぼえ(覺)
きえ(消)
きこえ(聞)
こえ(越)
こえ(肥)
こごえ(凍)
さえ(冴)
たえ(絕)
ひえ(冷)
ふえ(殖)
ほえ(吠・吼)
もえ(燃)
もだえ(悶)

を・お・ほ・ふ

語の上では**を**・**お**が互に紛れ、語の下中では**ほ**・**を**が紛れる。**お**は語の中下に用ひることはない。左の語の外は語の上では**お**、中と下とでは**ほ**と書く。

を(男・雄・夫・牝)
をつと(夫)
をとこ(男)
め**を**と(夫婦)
たけ**を**(猛夫)
ますら**を**(丈夫)
をひ(甥・姪)
をゝし(雄雄)
を(小)
をとめ(少女)
をぢ(伯父・叔父)
をば(伯母・叔母)
を(女)
をみなへし(女郎花)

を(尾)
をばな(尾花)
を(緒)
はな**を**(鼻緒)
を(麻・苧)
をけ(桶)
をさ(簸)
をか(岡・丘・陸)
をかぼ(陸稻)
をがむ(拜)
をかし(可笑)
をかす(犯)
をぎ(荻)
をこ(痴・愚)
をこがまし(痴)
をさ(長)
をさなし(幼)
をさむ(治・修・收・藏・納)
をさ**を**さ(大抵)
をしどり(鴛鴦)
をしふ(教)
をしむ(惜)

をす(食・治)
をち(遠)
をちこち(遠近)
をととひ(一昨日)
をととし(一昨年)
をとり(囚・媒鳥)
をどる(踊・跳・躍)
をの(斧)
をののく(慄)
をはる(終・卒・了)
をり(檻)
をり(節)
をり(居)
をる(折)
をしき(折敷)
し**を**る(萎)
し**を**り(栞)
つづら**を**り(九十九折)
をろち(大蛇)
あ**を**(青)
あ**を**がひ(螺鈿・青貝)
あ**を**し・あ**を**む(青)

いさ**を**・いさ**を**し(功績)
う**を**(魚)
かつ**を**(鰹)
ひ**を**(氷魚)
しらう**を**(白魚)
か**を**る(香薫)
さ**を**(竿・棹)
し**を**ん(紫菀)
し**を**らし(可憐)
し**を**る(萎)
た**を**やか(嬋妍)
た**を**やめ(手弱女)
と**を**(十)
ばせ**を**(芭蕉)
ま**を**す(申)
みさ**を**(操)
み**を**(澪・水脈)
みを**つ**くし(澪標)
や**を**ら(徐)

ふと書いて**を**と發音する場合。

あふひ(葵)
あふぐ(仰)
あふぎ(扇)
あふる(煽)
あふみ(近江)
とほたふみ(遠江)
きのふ(昨日)
けふ(今日)
さふらふ(候)
たふる(仆・倒)
たふとし(貴)
はふる(投)
ふくろふ(梟)

じ・ぢ

じ・**ぢ**は語の上・中・下どこにあつても**じ**に紛れる。左の語の外は**じ**と書く。

ぢ(父)
を**ぢ**(伯父・叔父・小父)
ぢぢ(爺・祖父)

ち(路)
やまち(山路)
よみち(黄泉)
すぢ(筋)
うぢ(氏)
ひぢ(臂)
あぢ(味)
あぢはひ(味)
あぢ(鯵)
いぢらし
かぢ(梶)
かぢ(鍛冶)
ひぢ(泥)
ふぢ(藤)
ふぢばかま(藤袴)
こうぢ(麴)
くぢら(鯨)
よぢる(攀)
けぢめ(區別)
ことぢ(琴柱)
ねぢ(螺旋)
ねぢく(拗)

あぢさゐ(紫陽花)
ちぢむ(縮)
なんぢ(汝)
もみぢ(紅葉)
わらぢ(草鞋)
なめくぢ(蛞蝓)
みそぢ(三十)
よそぢ(四十)
いそぢ(五十)
むそぢ(六十)

ず・づ

ず・づは語の上・中・下どこにあつてもともに紛れる。左の語の外は、づと書く。

ずす(誦)
ずず・じゆず(數珠)
ずるし・ずるける(狡猾・怠慢)
あんず(杏子)
ゆず(柚子)
いしずゑ(礎)
こずゑ(梢・末)

かず(數)
かならず(必)
きず(傷・疵・瑕)
くず(葛・國栖)
すず(鈴・錫)
すずき(鱸)
すずし・すずむ(涼)
すずしろ(蘿蔔)
すずな(菘)
すずめ(雀)
すずり(硯)
すずろ(漫)
たたずむ(佇)
なずらふ(準)
ねずみ(鼠)
はず(筈・弭)
やはず(矢筈)
ゆはず(弭)
はずみ(機)
まず(雜・交・混)
みみず(蚯蚓)
もず(百舌鳥・鵙)

さ行變格活用の濁れるもの。
禁ず信ず等

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正)(千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不世丙並
【丨】中
【丶】丸主
【ノ】之久乏乘
【乙】乙九乞也乳亂
【亅】了事
【二】二互五井
【亠】亡交亦京亭
【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伸伺似位低住佐何余佳佛作使來例侍供依侮侯侵便係促俊俗保俠信修倶俳俵俸倉個倍倒候借倫倂假偉偏停健側偶傍傑備催傳債傷傾僅働像僚僞僧價儀億儉償優
【儿】元兄充兆兇先光克兌免兒
【入】入內全兩
【八】八公六共兵其具典兼
【冂】冊再
【冖】冗
【冫】冬冷凉准凌凍
【几】凡
【凵】凶出
【刀】刀刃分切刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛副剰割創劇劍劑
【力】力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝勞募勢勤勳勵勸
【勹】包
【匕】化北
【匚】區
【十】十千升午半卑卒卓協南博
【卜】占
【卩】印危却卵卷卽
【厂】厄厘厚原厥
【厶】去參
【又】及友反叔取受
【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告咸周味呼命和咽哀品員哲唐唯唱商問啓善喉喜喪喫單嗣嘉器噴嚴囑
【囗】囚四回因困固國圍園圓圖團
【土】土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓塀增墨墮壁壇壓壌
【士】士壯壹壽
【夂】夏
【夕】夕外多夜夢
【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮
【女】女奴好如妃妊妥妙妨妹妻姉始姑姓委姦姪

姬姻姿威娘娛娠娼婚婦
婿媒嫁嫡嫌孃

【子】子字存孝季孤孫學

【宀】宅守安宏完宗官定宜客宣室宮害宴家容宿寄密富寒察寢實審寫寬寶

【寸】寸寺封射將專尉尊尋對導

【小】小少尙

【尢】就

【尸】尺尼尾尿局居屆屈屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸峠峯島峡崇崎崩

【巛】川州巡巢

【工】工左巧巨差

【己】己

【巾】市布帆希帝帥師席帳帶常帽幅幕幣

【干】干平年幸幹

【幺】幻幼幾

【广】床序庶店府度座庫庭庶康廉廓廢廣廳

【廴】延廷建廻

【廾】弄弊

【弋】式

【弓】弓弔引弟弱張强彈

【彡】形彩彫影彰

【彳】役彼往征待律後徐徑徒得從御復微徵德徹

【心】心必忌忍志忘忙忠快念怒思怠急性怨怪怯恐恥恨恩恭息悔悟悖患悲惟悼情惑惜惠悪惰惱想愁愉意愚愛感慈態慕慘慢慎慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲憶憾憤憑應懲懷懸戀

【戈】成我戒戰戲戴

【戸】戸戻房所扇

【手】手才打扱扶批承技抑投抗折抱抵押披抽拂拍拒拓拔拘拙招拜括拳拾持指振捕捧描捨掃授掌排掛採探控推揚接提換握挿揭揮援損搖搜摘携摩撫擇擊操擔據擬擴攝

【支】支

【攴】收改攻放政故敍教敏救敗敢散敬敵敷數整

【文】文

【斗】斗料斜

【斤】斤斥斬新斷斯

【方】方施旋族族旗

【无】既

【日】日旦旨早旬旭昇昌明易昔星春昭昨是映時晩晝普景晴晶智暇暖暗暑暮暴曆曇曜

【曰】曲更書曹會替最會

【月】月有朋服朕朗望朝期

【木】木未末本札朱机朽杉材村束柿杯東松板枕林枚果枝枯架柄某染柔杳柩柱柳栗校株根格栽桃案桐桑梅條梨械棄棋棒棟森棺植楠業極榮構概樂樓標樞模樣樹橋機橫檄檢櫻欄權

【欠】欠欲款欺歌歎歐歡

【止】止正此歩武歳歴歸

【歹】死殊殉殖殘

【殳】段殺毀毀

【毋】母每毒

【比】比

【毛】毛

【氏】氏民

【气】氣

【水】水氷永汁求汗汚江池決汽沈沒沖沙汰河沸油治沼沿況泉泊法波泣泥注泰泳洋洗津洪活派流浦浪浮浴海浸消涉液淑涙淡淨淫深混清淺添減淵渡溫測港渴湖湧湯源準溢溶溺滅滋滑滯滴滿漁漂漆漏演漕漠漢漫漸潔潛潮澤激濁濃濕濟濱瀧灣

【火】火灰災炊炎炭烈無然煉煮煙照煩熱熱燃燈燒營爆爐

【爪】爪爭爲爵

【父】父

【爻】爾

【片】片版牌

【牙】牙

【牛】牛牧物牲特犧

【犬】犬犯狀狂狩狹猛猫猶獄獨獲獵獻

【玄】玄率

【玉】玉王玩珍珠班現球理琴環璽

【瓦】瓦瓶

【甘】甘甚

【生】生産甥

【用】用

【田】田由甲申男町畀畏畑畜畝略番畫異畳當疊

【疋】疋疎疑

【疒】疫疲疾病症痘痛痢療癖

【癶】登發

【白】白百的皆皇

【皮】皮

【皿】皿盆益盛盜盟盡監盤

【目】目盲直相省眉看眞眠眼着睡督

【矢】矢知短

【石】石砂砲破研硬硯碁碎碑確磁磨礎

【示】示社祈祕祖祝神票祭禁禍福禦禮

【禾】秀私秋科秒租秩移税程稚種稱稻稿穀積穂穩

【穴】穴究空突窃窒窓窮

【立】立章童端競

【竹】竹竿笑笛符第筆等筋筒答策算管箱節範築篤簡簿籍

【米】米粉粒粘粗粹精糖糞

【糸】系紀約紅紋納純紙紐紛素紡索紫累細紳紹紺終組結絶絡給統絲絹經綠維綱網綴綻綿緊緒線緒緣編緩緯練縛縣縫縮縱總績繁織繕繪繭繰繼續

【岳】缺
【网】罪置署罰罵罷羅
【羊】羊美羣義
【羽】羽翁翌習翼
【老】老考者
【而】耐
【耒】耕
【耳】耳聖聞聯聲職聽
【聿】肅肇
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胴胸能脊脈脊
脚脱腐腕腦腰腸腹膚膜
膝膽臆膺臓
【臣】臣臥臨
【自】自臭
【至】至致臺
【臼】與興舉舊
【舌】舌舎

【舛】舞
【舟】舟航般舵舶船艦
【艮】良
【色】色
【艸】芝花芽芳苑苗若苦
英茂茶草荒荷荘菊菌菓
栄華萬落葉著葬蒙蒸蓄
蔓薄藏藝藤藥
【虍】虎虐處虚號
【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶
蠻
【血】血衆
【行】行術街衢衛
【衣】衣表袁袋袖被裁裂
裏裕補裝裸製複褒襲
【西】西要覆
【見】見規視親覺覽觀
【角】角解觸

【言】言訂計討訓託記訟
訪設許訴診詐詔評詞詠
試詩詰話詳誇誌認誓誕
誘語誠誤說課調談請論
諭諸諾謀謁諮講謝謠謹
謬證識譜警譯議護譽讀
變讓
【谷】谷
【豆】豆豊
【豕】豚象豪豫
【貝】貝貞負財貧貨販貫
責貯貳貴買貸費貿賀賃
賄資賊賓賜賞賢賣賤賦
質賴購贈贊
【赤】赤
【走】走赴起超越趣
【足】足距跡路踊躍
【身】身

【車】車軌軍軒軟軸較載
輕輩輪輯輸與轉
【辛】辛辨辭辯
【辰】辰農
【辵】辺迎近返迫迭述迷
追退送逃逆透逐途通速
造連週進逸遂遇遊運過
道達違遙遞遠遣適遭遲
遷選遺避還邊邂
【邑】邦邪邸郊郎郡部郵
都鄉
【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
醜醫
【釆】釋
【里】里重野量
【金】金釜針釣鈍鈴鉛鉢
銀銃銅銘鋭鋒鋼錯錄錢
鍋鎖鎮鏡鑄鐘鐵鑑鑛

【長】長
【門】門閉開閑問閣閲關
【阜】防附降限陛院陣除
陪陳陰陵陶陷陸陽隆隊
階隔隙際障隣隨險隱
【隹】隻雀雄雅集雇雌雙
雜離難
【雨】雨雪雲零雷電需震
霜霧露靈
【靑】靑靜
【非】非

【面】面
【革】革靴
【音】音響
【頁】頂項順頓預頑領頭
頻題額顏願顧類顧顯
【風】風
【飛】飛飜
【食】食飢飲飯飾養餓餘
餅館餐
【首】首
【香】香

【馬】馬馳駁駄駐騎騰騒
驅驗驚驛
【骨】骨髓體
【高】高
【髟】髮
【鬥】鬪
【鬼】鬼魂魔
【魚】魚鮮鯉鯛
【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
【鹵】鹽
【鹿】鹿麗

【麥】麥
【麻】麻
【黃】黃
【黑】黑默點黨
【鼓】鼓
【鼻】鼻
【齊】齋
【齒】齒齡
【龍】龍
【龜】龜

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと
(二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること
(三) 代名詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと
(四) 外來語は假名で書くこと。

略字表

（臨時國語調査會發表）

左の字體を本位として用ひること。
（括弧内の小字は字典體）

勧（勸）　権（權）　潅（灌）　歓（歡）　観（觀）
沢（澤）　択（擇）　訳（譯）　駅（驛）　釈（釋）
変（變）　恋（戀）　蛮（蠻）　湾（灣）
茎（莖）　径（徑）　経（經）　軽（輕）
併（併）　塀（塀）　瓶（瓶）　餅（餅）　研（研）
斉（齊）　斎（齋）　済（濟）　剤（劑）
残（殘）　浅（淺）　賤（賤）　銭（錢）
労（勞）　営（營）　栄（榮）　学（學）　覚（覺）

挙（擧）　誉（譽）　断（斷）　継（繼）
歯（齒）　齢（齡）　湿（濕）　顕（顯）
窓（窗）　総（總）　属（屬）　嘱（囑）
為（爲）　偽（僞）　帯（帶）　滞（滯）
参（參）　惨（慘）　両（兩）　満（滿）
発（發）　廃（廢）　鼠（鼠）　猟（獵）
乱（亂）　辞（辭）　潜（潛）　賛（贊）
走（走）　徒（徒）　従（從）　縦（縱）
悩（惱）　脳（腦）　処（處）　拠（據）
担（擔）　胆（膽）　来（來）　麦（麥）
寿（壽）　鋳（鑄）　数（數）　楼（樓）

薬（藥）　葉（葉）　読（讀）　続（續）
竜（龍）　滝（瀧）　随（隨）　髄（髓）
庶（鹿）　麗（麗）　聴（聽）　廳（廳）
虚（虛）　戯（戲）　遅（遲）　解（解）
独（獨）　触（觸）　畳（疊）　摂（攝）
虫（蟲）　蚕（蠶）　仮（假）　児（兒）
励（勵）　嘗（嘗）　国（國）　囲（圍）
円（圓）　図（圖）　壱（壹）　実（實）
写（寫）　宝（寶）　扣（控）　叙（敍）
条（條）　様（樣）　帰（歸）　気（氣）
炉（爐）　犠（犧）　献（獻）　画（畫）

当（當）　尽（盡）　礼（禮）　称（稱）
糸（絲）　欠（缺）　声（聲）　台（臺）
旧（舊）　万（萬）　号（號）　証（證）
豊（豐）　弁（辨）（辯）　逓（遞）　辺（邊）
医（醫）　鉄（鐵）　関（關）　双（雙）
霊（靈）　余（餘）　舘（館）　体（體）
塩（鹽）　点（點）　覚（覺）
闘（鬪）　剣（劍）　亀（龜）

國字表

（下欄の讀み方は歴史的假名遣による。）

ア

鯏 あさり
遖 あつばれ
鮟 あん

イ

鵤 いかるが
鮴 いさざ
鵙 いすか
圦 いり
鰯 いわし

ウ

鰄 うぐひ
繧 うん
饂 うん

エ

鱠 えそ
鮖 えり

オ

鮠 おほぼら
俤 おもかげ
瓮 おろし

カ

鳰 かいつぶり
鯑 かう
糀 かうぢ
嬶 かかあ
鷭 かけす
錺 かざり
樫 かし
鷭 かしどり
鉾 かすがひ
鑓 かすがひ
紹 かすり
續 かすり
桿 かせ
紹 かせ
栝 かつら
椛 かへで
裃 かみしも
苅 かる

キ

鯤 きぎ
鴇 きくいただき
杣 きこり
鱚 きす
瓩 キログラム
粁 キロメートル

ク

椚 くぬぎ
粂 くめ
喰 くらふ
俥 くるま

コ

咖 こう
凧 こがらし
鮴 こち
鮖 こち
鮗 このしろ
鞐 ことはぜ
椢 ことひ
込 こみ
込 こむ

込 こめ
怺 こらふ
怺 こらへる

サ

榊 さかき
笹 ささ
篠 ささら
癪 ささしこみ
鰓 さば

シ

鰰 しいら
琥 しかと
鳴 しぎ
栃 しきみ
躾 しつけ
扒 しぼる
搾 しぼる
癪 しやく
鯱 しやちほこ

ス

椙 すぎ
鮭 すばしり
辻 すべる
膵 すね

セ

躾 せがれ
腺 せん
廻 センチグラム
糎 センチメートル

ソ

杣 そま

タ

峠 たうげ
凧 たこ
襷 たすき
燵 たつ
鱈 たら

チ

衝 ちどり
諚 ちやう
狆 ちん

ツ

栂 つが
間 つかふ
間 つかへ
欟 つき
鶫 つぐみ
辻 つじ
褄 つま

テ

瓧 デカグラム
料 デカメートル
瓩 デシグラム

ト

働 どう
栂 とが
鴇 とき
栃 とち
鯲 どぢやう
迚 とて
迚 とても
鞆 とも

ナ

凪 なぎ
凪 なぐ

鮒 なまづ
鯰 なまづ

ニ

錵 にえ
鯀 にしん
鳩 にほ
匂 にほふ

ハ

鰆 はえ
硲 はざま
畑 はた
畠 はた
畠 はたけ
鰰 はたはた
鱈 はたはた
働 はたらき
働 はたらく

噺 はなし
鈩 はばき
鍔 はばき
扨 はめる
鱚 はらか
椽 はんざう

ヒ

鰉 ひがひ
鋲 びやう

フ

梺 ふもと

ヘ

瓲 ヘクトグラム

マ

俣 また
鰍 まて
麿 まろ

ミ

瓲 ミリグラム
粍 ミリメートル

ム

拷 むしる
毫 むしる
椋 むろ

モ

杢 もく
籾 もみ
桃 もみぢ
匁 もんめ

ヤ

軈 やがて
鑓 やり

ユ

裄 ゆき

ワ

枠 わく

ヲ

緘 をどし

文部省檢定濟

昭和十三年二月十五日　高等女學校・實業學校國語科用

昭和十二年八月　五　日印刷
昭和十二年八月十五日發行
昭和十三年一月二十二日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十七日訂正再版發行

女子新國語讀本 新制版
定價各金六拾錢

編者　澤瀉久孝　木枝增一

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目二十五番地　合資會社　東京修文館　代表者　鈴木金之助

發行者　大阪市東區博勞町五丁目五十六番地　株式會社　修文館　代表者　鈴木常松

發行所

東京市神田區神保町一丁目二十五番地　振替口座東京二六四四番　合資會社　東京修文館

大阪市東區博勞町五丁目五十六番地　振替口座大阪四七一番　株式會社　修文館

おもだかきえだ
檢定濟
文部省

二B 岸保千里